婦人と子供

第一卷
第十六號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但實疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書振假名附のこと。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざること。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。

一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行	毎月一回五日發行○第一號明治三十四年一月二十日發行
定價	一册金拾錢郵稅金壹錢○六册前金五拾七錢郵稅金六錢○拾貳册前金壹圓拾錢郵稅金拾貳錢○臨時增刊は其都度定價を定めて別に申し受く○切手代用は壹割增にて壹錢切手に限る
注文	は總て前金にて日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂宛領收證は別に發送せず本誌の到達を以て領收の證と心得らるべし送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取人金昌堂宛の事見本を要せらるゝときは郵便切手(但し壹錢に限る)拾貳枚を添へて申越さる可し
購讀者	宿所姓名は楷書にて御認めの事○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ○前金相切れ候節は赤にて●印を御姓名の上に附し候間前金御送付を乞ふ○御入用なき時は御斷りを乞ふ
編輯	に關する御照會及原稿御寄贈の節は東京本郷區女子高等師範學校附屬幼稚園內フレーベル會宛のこと
廣告料	三十二行廿四字詰一行十八錢○特別欄一行四十錢○一等二十錢○特別半頁十一圓○一頁二十圓○一等半頁五圓八十錢○一頁十圓○二等半頁五圓○一頁八圓

明治三十四年十二月二日印刷
同　年十二月五日發行

不許複製

發行兼編輯者　東京市本郷區元町二丁目六十六番地　江崎政芳
印刷者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　日下主計
印刷所　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　熊田活版所
發行所　女子高等師範學校附屬幼稚園內フレーベル會
發賣所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂
大賣捌所　東京東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

本號には懸賞論題あり!!

婦人と子ども第一卷第十二號目次

子ども

黑子太郎。室內手遊。獨逸教育話。謎々

家庭

母たらん言葉……高木四郎
掃除……香園女史
今いろは料理……石井泰次郎
昔或母の日記……無名氏

學術

昆虫標本製作法……ろすい

講義

兒童研究法……文學士　松本孝次郎

史傳

野村望東尼……下村三四吉

文苑

天長節に友を招く……池田愛子
公德唱歌（其三、其四）……學校の詩人
四季……小林恒子

遊漁……東粲子
和歌、俳句、子、外數十首……佐々木信綱、數十首

說林

歲末の辭……記者
罰につきて（ミス、ヒユース）談話の一節……林ふみ子
……松村久子

寄書

理想的の夫の具備すべき資格につきて答ふ……京都　太田みき子
子供に聞かす咄につき……伊豫　清家みすゑ
上總の羽子つき歌……東京　じ、はやし生

雜錄

十二月の天地……摩訶生
冬至……せ、く、
汽車旅行と道連の幼兒……ひさ子生
益軒先生の年中家事……下村生

彙報

數十件、新刊紹介、會報

豫告！

明治三十五年を迎ふると共に、婦人と子ともは茲に滿一歳の齡に達せんとし、將に新年一月五日を以て、第二卷第壹號を發刊せんとす。既往一年間に於ける本誌の婦人教育、家庭教育、幼稚保育に向つて貢献せし功績は敢て贅せず。將來益奮つて當初の目的に到達せんとす。乞ふ第二卷第壹號の豫告を見よ。

子ども欄に於けるやまとの翁の黑子太郎は益佳境に進み、室内手遊、一口話等の外更に面白き戸外遊戯は愉快なる唱歌に伴うて顯はるべく、其他の各欄例によりて、愈賑なるが中に別して

女子教育談　高等師範學校長　嘉納治五郎
ニューイングランドの一家庭　同校教授　文學博士　松本亦太郎
娯樂の選擇　女子高等師範學校教授　佐方鎮子
我國玩具遊戯の起元　同　校　教　授　關根正直
兒童と天然　女子高等師範學校教授　安井哲子

等諸先生の名論卓説を見るべく、而して野村望東尼の面影を活躍せしめて尤も喝采を博されたる下村同校教授は、又新に其雄健の史筆を史傳欄に振はるべく鄭越生縱横の史筆と相幷んで光彩愈陸離たり。摩訶生の一月の天地、潺生の會津城趾は共に最輕妙の文字、和歌子氏の和歌浦案内亦是れ穩健の好文字。此の如くにして一面には記事の精撰、材料の豐富に勉め一面には又將に本誌の体裁を一新せんとす。即表紙は女子高等師範學校講師森川梅屋畫伯の揮毫になれる精巧優美なる春秋の景を寫せるものを以てし、其他所々に同畫伯輕快の畫筆を挾入して趣味を添ふべく、特に本號卷首には寫眞版數葉を添ふべし。乞ふ新年一月五日を以て出でんとする本誌第二卷第一號が如何の盛裝を以て諸君に見えんとするか、活目して待たれよ。

發行所　東京本郷女子高等師範學校附屬幼稚園内
大賣捌　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　フレーベル會　金昌堂

本號は特に數千部を增版するを以て、此際入會者購讀者は至急申し込まれたし。たゞし入會者は申し込み會費納附等すべて發行所宛のこと、購讀者は大賣捌所に御註文のこと。

フレーベル會規則

第一條　本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條　會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ

第四條　會員ハ本會ノ經費トシテ一ケ月金拾錢ヲ醵出スベシ

第五條　令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條　本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ、

一　總會　毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選擧等ヲナス

一　常會　毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス

一　組合會　會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス

一　雜誌發行　毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス

一　前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第七條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一人　會務ヲ總理ス

主幹　一人　會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事　十人　會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員　若干人　重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス

第八條　會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第九條　主幹ハ會長ノ特選トス

第十條　幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス

但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス

第十一條　評議員ハ會長ノ特選トス

第十二條　本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルヽコトアルベシ

第十三條　此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

◉小學校賞與品及び家庭の讀本に最適當の書

家庭訓話　昔噺桃太郎

家庭訓話　昔噺花咲ぢゝ

家庭訓話　昔噺舌切すゞめ

家庭訓話　昔噺かちく山

◉木版密畫極彩色頗美裝製本

定價　各金十二錢　郵稅各金二錢

本書は繪畫を主としたる家庭教訓にして今回印刷するに至りたるものなり、されば畫は有名なる大家の筆、彫刻極めて巧緻、紙質良好、印刷鮮明、畫風といひ、彩色といひ表裝といひ實に高尚優美なり世の中產以上の人々よ速かに一本を家庭に供へて御伽噺の資に供せられよ、

發行所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂

婦人と子ども　第一卷第拾貳號　（明治三十四年十二月五日）

（本欄は凡て轉載を禁ず）

黑子太郎（つゞき）

やまとの翁

強盜どもわ、自分の留主の處え、黑子太郎が來て遠慮なしに寢てるのを見たのですから、大變に怒って『誰だ〳〵何者だ』といって騷ぎだしました。

そこで老婆さんわ、『あー此子わね　道に迷ったん

だといって　前程來ましたから　私しや可愛相だと思って寢かしてやったのさ。　何だか王様の手紙を。お后の所え持って行くのだ相な』　と、　話しました。

ずると強盗どもわ、　そっと手紙を取り出して讀んで見て、　始めて此子わ　手紙を持って行くと　すぐ殺されるのだとゆーことが分りましたから　さすがの強盗どもゝ　何だか可愛相に思って來まして、

甲盗『君、　どーです、　此子わ自分が殺される使に行くんだね』

乙盗『そーさ　可愛相なもんだね。

丙鴛どーかして助けてやろーじゃないか』
と口々に言ー合って居ますと、其中の大將が『よし
よし、已が一つ工夫してやろー』とゆーので、やが
て　其手紙を　ずだ〳〵にひきさいて仕舞って、そ
れから　自分で筆を取って　他の手紙を書きました。
それにわ　こーゆーのが書いてある。
この若者が行ったら　皇女の聟にしなさい』
そこで　そっと元の樣に黑子太郎の懷中に入れて
置いて、偖夜が明けてから　道を敎えて　出立させ
てやりました。

それからだん〳〵道を急いで黒子太郎わとーぐお后の所え着いて彼の手紙を渡しますと、お后わそれを眞實に王様の手紙だと思いましたから、すぐに立派なお酒宴を始めて、黒子太郎をお姫様のお聟さんにして仕舞いました。

後で王様がお歸りになって、大變びっくりしまして、お后に『どーしてこんな間違をしたのか、朕わ彼を殺してしまえと書いておった筈だが』といってそれわ〳〵非常な不機嫌ですから、お后わ、『それでも陛下のお手紙わこゝに在りますから ご覽な

さい』といって　王様に見せました。

王様わ　夫をご覧になると　なるほどご自分でお書きになったのと違う。そこで何でも黑子太郎がどこかで取り代えたのだと思って、大變に怒って、黑子太郎をよび出して、お尋になる。すると黑子太郎も一向知らないのだから

『私わ何んにも知らないんです。けれども　もし手紙が代って居ると仰しゃるなら　夫わ私の泊った森の中で强盜どもが取り代えたのでしょ』

こーいったもんですから　王様わ又大變に怒り出

して

『よし〳〵夫なら夫でよし　然し黑子太郎よ、朕の所の聟さんになるにわ　鬼の頭に生えてる金の毛を三本取って來て朕に渡さんければならぬが、　夫が出來るかどーじゃ？　出來なければすぐ逐い出してしまうのじゃ』

よもや　太郎に出來そーにもないと思われたからこーいって　王樣わ　黑子太郎を逐いだす積りなのです。　所が黑子太郎わ　わけもなく『三本の金の毛、かしこまりました、取ってきましょー』といって、

お遑乞をして　どこえともなく出てしまいました。

さても黒子太郎わ。だん〳〵道を急いで行きました所が、一つの大きな町え着きました。すると町の門番が居つて『これ〳〵お前の名わ』と問いますから『黒子太郎』と答える。門番わ又『お前わ何を知ってるのか』といーますから『なんでも知ってる』と答えました。しますと門番のいーますにわ

『それじや　この町にお酒の流れてくる河があつたのだが　どーしたのか　近頃わ　夫が留ってしまって水一滴も流れてこない　どーかその譯をいってく

れませんか』といーますから、太郎わ『そんなことわ　なんでもない　けれども私しの歸りにいってやろー』それから　こゝを通って行きました所が　今度わまた　大きな町え來ました。そこの門番が　又前の様に尋ねまして、太郎がなんでも知ってるとゆーのを聞ーて、

『それじや　此町に金の林檎のなる木があったのがどーしたのか　近頃わ一っもならない様になって、丸で葉も落ちて仕舞うのわ　何故でしょーか　どーか其譯を聞かせて下さい』それで太郎わ『僕わ、チ

ヤンと知ってる　けれども　今わ急ぐのだから歸り
にいってやろー』
そこでだん〳〵行きました所が　今度わ大きな川
え出て來ました。そこに一人の渡守が居って　また
太郎に　何か知ってるかと聞ますから　前の樣に
なんでも知ってると答えました所が　渡守のゆーに
わ、
『私わ、こゝでもー何十年とゆー　長い間こーやっ
て　あちらこちらと船を漕いでるのだが　もーどー
かして　船漕ぎを已めて欲しいと思っても　どーし

ても宥されないで　いつまでも〳〵漕いでねばならないとゆーのわ　なぜでしょーか　いって下さい」

黑子太郎わ　「その譯か　いって上げよー　けれども私の歸りまでお待ちなさい」

この河を渡って行きますとすぐ向ーに鬼の棲家の入口が見えます。　やれ〳〵とー〴〵來たわと思って

黑子太郎わ　少しも恐れないで　ずん〳〵と這入って行きますと　何んだかそこらが　薄暗くって變に妙な臭氣がします。　構わないで　だん〳〵奥え行きました所が　丁度この時わ　鬼がお留主で　鬼

のお老婆さんが　獨り大きな〳〵座布團に座って
すっぱ〳〵煙草を飲んで居ます。
老婆さんわ　太郎の這入って來たのを見て　じろ
じろと眺めながら『おや　變だよ　お前わ人間じゃ
ないか　一体何しに來たの』。
太郎『私わ　こゝの大將の頭に生えてる金の髪の毛を
三本だけ貰いに來たんです　でなければ私わ、王樣
のお姫樣を貰うことが出來ないんですから』
老婆『おや〳〵何とゆー大膽なことだろー！　今にも
大將が歸って來て　お前を見つけたら　それこそお

前　命がないよ……併しまーじっとして靜にして居ってご覽　萬一すると私が助けてやることが出來るかも知れない。」

鬼の老婆さんが　こーいーながら　やがて太郎を小さな〈一疋の蟻にして仕舞いまして　それから老婆さんの衣服のす

そに這入つて　默つてじっとしておいでと　いーつけました。

そこで蟻になった太郎わ　急に小さくなって　ぞろ〳〵とすその方に這いこみながら

『ありがとー〳〵、けれど　お老婆さん　私しに三の事を教えて頂戴。

一っわ、あのお酒の流れる河がなぜ干あがって仕舞ったんですか、

も一っは、あの金の林檎がなぜならなくなってしまったんですか、

それからもー一っ、あの渡守が　毎日年から年中あーやって漕いで居って　どーしても宥されないのわ

何故でしょう。これだけ教えて下さいな』

すると老婆さんわ『うん　どれもこれも　みなむつかしいな　しかし今に大將がもどって　何かゆーから　默って夫を聞いて居れは分るか知れないよ』

（つゞく）

室内手遊

摺み方

今迄申した摺み方わ、最初に長い四角を造るのでしたが、今度わそーでなしに、一のよーに先つ三角に摺むのです、これかもとでいろいろの形が出來ますか、先つこれを肩掛といたしませよー。

それから又これを二つに折つて、二のよーに小さな三角にして立てますと、ふ山になります。

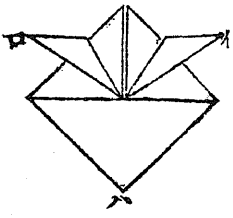
次きにわお山を、又もとの肩掛になをして、イの縁を少し横に折つて、四のよーにし、四のイとロとの角をハの角に合せて能く線を付けますと、五のよーになります、これは襦袢です。

それから又襦袢のイとロとの角を折つて、襟の下へ入れひろげますと、六の塵取か出來ます。

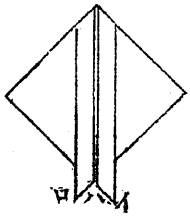
これから兜を造るのですか、これは肩掛のよーに折り又ふ山の樣にして線を付け、七のイとロとの角をハの角に合せて折り、又イロの端を折りかえして、八のよーにし、又それを九のよーにをりそのイの所を一枚取つて、十の通りにをり、そのイとロとの角を裏の方え少しをり、殘つた所を全く裏にかえして、十一のよーにするのです、これわかぶることか出來ます。

次きわ蟬ですか、これは兜の八を少しかえて、十二のよーにをり、下の二枚殘つて居る所は、兜の十と同しよーに折り、次きわ十一と同しよーにをるのですか、兩端を深く折つて、重りあう位にし、最後に折り返えした先きをその中へはさむのです。

九

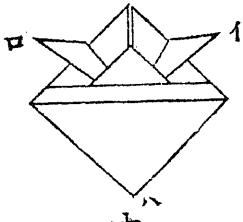


五

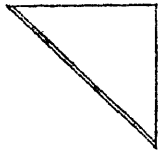


一

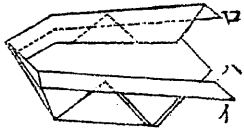
十



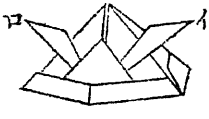
二



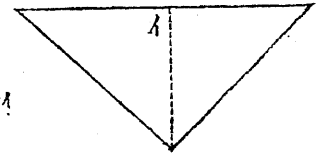
六



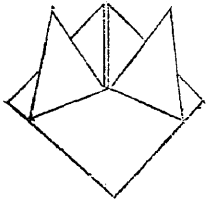
十一



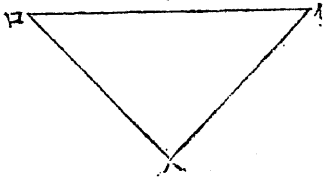
三



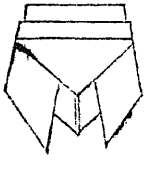
十二



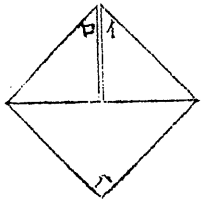
七



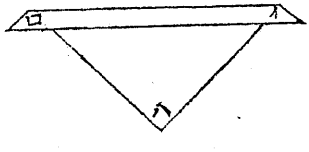
十三



八



四



短篇 獨逸教育話

其二、玉手箱

仁壽堂主人

或女主が家の經濟上に附ていろ〳〵ふしやはせな事がありまして其の財産が年々へつてまいりましたので、或る森の内に居る年老の隱者の所へ行きまして其の有樣を話しまして後『私の家では一度もよいことがありませんあなたなにか魔をよけるものはありますまいか』？とたづねました。

にこ〳〵しています白髪の隱者は其婦人にすこしおまちなさいと申して次の小さき房へ行きましたしばらくしまして小さい封じた箱を持參しまして『此箱を一年間晝三度夜三度、勝手、藏、馬舍及ひ家の隅々へ持ちまわるようになさい、さうしますと、よいことがむいてまいります、そして一年たちましたら此箱をお返しなさい』と云ひました。

女主は其小箱を大層信用しまして、せいだして持ちまはりました。次の日、藏へ參りますと下僕が「ビール」の瓶を持ちだす所でした、夜になりましておそくに勝手へまいりましたときには女中たちが氷菓子をこしらへてをりました馬舍へぬけて行きましたれは牛は糞だらけのところにをりまして、馬は麥の代りに枯草ばかりあてがはれてをりまして此の掃除がしてありません、此樣にしまして婦人は毎日〳〵不都合な事をとりしまりました。

やがて一年たちましてから其小箱をもつて婦人か隱者のところへ行きまして喜んで申しまするには『おかげさまで萬事よいつごうにまいりまして

難有ふございました、とうか私にもう一年此の箱をかして下さいませ、よほとけつこうなものがをさめてありましよふ』と云ひました。

そこで隱者が笑て申しますには『いや、まうなりません、しかし此箱の內にをさめてありますものはあなたの家にもありますものです』とて箱を開きました、しますと其中には一枚の白紙がありましただけてほかになんにもありませなんだ。

一口ばなし

或處に權太といつて、まことに惡口の男がありましたがある年の暮　途で友達に出遇つて　いきなり例の惡口を始めました。

權「オイ〳〵貧乏神、この大晦日に　不景氣な顏して何處へ行くのだ。」

しますと友達もぬからず

友「なーに君の處へ行くんだ」

權太はこの返事を聞いて　忌々しいと思つて別れましたが　偖てお正月元日になつて廻禮に出かけた途中、また彼の友達に遭ひましたが　先達ての惡口に懲りましたから　今度は一寸樣子をかへて。

權「オヤ　福の神さん　今日は何處から」

友「ヤー　たつた今君の處から　飛び出して來たんだ」

謎〳〵

(一)鉛筆とかけて

(二)上手な自轉車乘とかけて

なんとゝく

母たらん人の言葉

高木四郎

今や未來の母として、有爲の子女を、國家に貢がんとする、重大なる家庭教育の責任を有する、一般の女子は、子女を愛すると同時に、それだけの愛情を、この言葉の上にも拂って、兒童に幸ひする口をもって、膝下に是れを薫育し、禍の門となる樣な、危險な口をもって、接吻することは、注意せねばならぬ。それに、母の言葉は、母となって生れるものではなからう、であるから、母とならん前から、深く朝夕の言葉を愼んで兒童を、明智の域に導くに値するだけの言葉をつかって、重い任を完全に果さうといふ、高い理想を、確固たる意志の上において、これを卑近に斷行せねばならぬのである。

そこで、第一に、母の言葉が、兒童に對して、一般に多すぎるといふ事は、多くは、愛にはがされての事であるから、今一概に難ずることは、或は、酷であるといふ人もあらうが、しかし、愛といふものは、いかに濃くっても、必ず、理といふものを基礎として立たねばならぬので、道理を辨へない愛は、いはゆる痴情である。この痴情即ちはだされたる愛の、よくないものであるといふことは、誰れとて、知らない人はなからう。既に痴情

といふことの、甚だ恐るべきものであることを、知って居るならば、今日子の愛にひかされて、思はず知らず多く發する母の言葉は、即ち、子に對する母の、痴情から生ずるのであるから、害の甚だしきものなることも、從って明らかであらう。

して見れば、いかに愛情からでるとはいへ、決して吾人の觀過することの出來ない事がらではなからうか、かの前々號にのべた、金魚屋の來た時の母子の問答のごとき、若し、母が最初兒童に請求された時、今しばし、言葉を慎しむ事が出來たならば、或は、兒童をして泣かせずに、悲しませずに、すんだのではなかったらうか。これらの點について、今日からの一般の女子は、充分に注意研究して、兒童の愛にひかされると同時に、言葉を尊び愛するといふ情をもって、よくこれを制し得るだけの覺悟を要するのである。さうして、一時の情愛にひかされて、自然におのれの言葉の輕くかつ多くならぬ樣にし、それから生ずる弊害を、全く家庭から除去するといふことが、子女薫育の責めにあたって居る女子の、大切なしかも緊急な任務であらうと思ふ。

それから、第二に言はうとするのは、母子應答の言葉の事であるが、ふよそ、家庭で子に對して母が言葉を使用する場合は、應答と閑話との二つあるのであって、閑話といふのは、一日のうち一家團居して、時をさめ、歷史地理或は理化動植物等に、關係した談話をすることであれど、このことは、今日まだ我が國には誠に乏しい例なので、はとんどない位なことであるから、この事については、後日折もあらばいふこととして、今は、應答

の場合の言葉についてのみいふのである。

さて、應答の言葉は、大概、指示、命令禁止等であつて、常に兒童を左右する性質をもつて居るそれ故、嚴格を要するのは勿論であるが、しかし同時に、温情を含んで居らねば、その嚴格は、苛酷といふもので、少しも教育的でないのである。例へば、外へ出よ―とする時に、「外へいつてはいけませんよ」とか、金魚を買つてと請求した時に只「いけないよ」など、どういふわけであるかをも辨へない兒童に、かく容易に一言にして、これを否定しさるといふことは、倒底、兒童に對する愼重な言葉ゴかひでなく、兒童を輕んじた言葉なので、これらの言葉のうちには、兒童に對する温情といふものが乏しい、いはゞ苛酷な、邪險な無理な言葉である。譬ひ此の言葉を發した母の心はさうでなくとも、聞く身になつて考へたならば、さうではなからうか。ことに「うるさいねー」とか「いけないったら」などいふ言葉は、何たる無禮な言葉ではなからうか。兒童の權利を、何と無視した言葉ではなからうか。いかに親とはいへ、なほ兒童には兒童だけの自由を許し、あるところまでの權利は、これを認めて、その範圍内にまで立ちいった言は、大いに愼まなくてはならないのである。これも今日までの弊風として、天下の兒童を、唯我かものゝごとくしたのであるが、今後の親は、大いに注意せねばならぬ事と思ふ。余は以上のごとき言葉のうちには、温情などといふことを、些も認めることが出來ないのである。ことに又、兒童を左右する位置に居る、母の言葉にして、「どうでもなさい」などいふに至っては、實に邪險と思は

ずして、何とか聞かん。すべて、命令し禁止し指示する言葉は、必ずいつも明瞭でなくてはならぬのであるに、かゝる曖昧至極な言葉を、特に兒童にむかって、かりにも發し、さうして、よく言ふ事を聞く順良な性質を備へさせよーとするのは、何たる無理なことではなからうか。兒童はかういふ言葉をきいて、何と心に感ずるであらう。是非善惡を判ずることが出來ない兒童に、「どうでもせよ」といふ、しかも兒童と同じく、どうしてよいのか、もののわからぬ母ならば知らず、又狂人ならば問はないが、世には隨分ものゝわかった母でも、他の事の忙がしい時などには、面倒をいとって、かういふ答へをするものも、なくはないよーであるが、かういふ言葉を聞いた時の兒童の心は、いかに殘念に、いかばかりまた悲しいであらうか

余は、兒童がかういふ言葉を多く耳にし、一種悲哀な感を、心裡に印した結果は、將來にまでわたって、いかなる性質をかたちづくるであらうかと恐しくさへ思ふのである、又以前には「外へいってはいけない」といひながら、ずぐ「遠くへいってはいけないといふのさ」と言ひぬけ一度は「よせ」と禁じ、二度目には、兒童の目的を達せしめ最後には「買ってあげたから、おとなしくしなければいけません」などいひ、又、方便がついに僞りとなって、兒童を悲嘆にむせばせるなどは、骨稽といはんか、何といはんか、とても教育的とはおもはれぬ。よし一營生上において、または作法上において、家庭で嚴格であるといっても、それら、營生作法等の教育も、皆これ此の言葉がさきにたって、指示命令或は禁止して導くのであるの

だから、かういふ教育的でない言葉をつかふ家庭に、教育的薫育が、いかなる方面になりとも、行はれるはづは、決してないと斷言することが出來るのである。

指示して言ふことをきかず、命令して言ふことをきかず、將禁止して言ふことをきかない兒童をどうして明智の域に導く事が出來よー。であるから、兒童は、常によくいふことをきくよーにしつけるのが、第一に必要なのである、またそれと同時に、母はあまり禁止せず命令せずして、或時は邪魔になつても、又亂暴しても、なるべく兒童の自由活動を舒長させるよーにつとめて、これをさまたけず、面倒と思ふことも、うるさいと感ずることも、こは兒童の本性として恐び、止むを得ない時か、または、當然なる場合においては、簡單にその理非を說きて、或時は禁じ或時は指示し、または命令して、決行させねばならぬのである。であるから、禁止し指示し命令する言葉は、余義ない時においてのみ發せられたるので、多くの場合は、子女の欲するまゝにし、いづれにても害なき限りは、これを放任して、その自由をみとめねばならぬのである。今日の一般のごとく、或時は母が兒童と同等のものなるかのごとく、又或時は兒童の權利自由を、全然剝奪して、これを束縛しまた甚だしきに至つては、腕力をもつてひきずらんとするがごときは、その所作は野蠻といふべくまた、誠に不見識といはざるを得ないので、これではその權威が、兒童に無視されるのは當然にあるといはねばならぬ。

古暦ほしき人には參らせん　　風雲

掃除

香園女史

家屋は日々の掃除を怠らないやうにしなければなりません掃除は實に一家の健康を保つものであつて掃除を致します目的は塵埃を取り除く爲でございますから其心持でしなければなりません

學校とか病院等で掃除をする處を見ますと種々の仕方があります先づ室内にある器物を拂つて置きましてそして床の上を掃き暫くして拭きます所もありますこれは最丁寧な仕方で大抵は床の面に水をまいてあとをはきますそれまでにも手の屆きませんときには只はくばかりにしておきます第三の掃除の仕方は最も不完全で御ざいます折角はじめに拂ツておきました處も床をはきました爲めに塵埃かたちまして又々不潔になりますそれゆゑ少

は面倒ではありますけれとも床を掃く前に水をまきまして床を濕し塵埃のたちませんやうに致しておきまして掃きますといくらか清潔になり掃除の趣意にも叶ひます今一層丁寧にはきましたあと雑巾にて拭きますと最清潔になりまして宜からうと思ひます併是には大層手數と時間のかゝる事でありますから毎日は出來ませんかもしれませんが一週間に一度か或は一月に一度でも大掃除として此掃除を致しましたならはよろしからうと思ひます是は西洋風の家屋の掃除の仕方であります

日本風の家屋で御座いましても掃除の順序は前申しましたのと同樣で御座いますが仕方か少し違ひます先づ拂塵箒にて戸障子襖をはらひまして其戸障子をすつかりあけはらひそれから床棚器物などを丁寧に拂ひ下をはくので御座います掃きます

には室内にありました器物は静かに側に移しまして其下を掃かなければなりませんすべて部屋の隅の方は人の目に見えかねますから自然掃除を怠り易きものでございます昔から四角の部屋を丸く掃くなと戒めて御座いますか遂隅の方とか物陰は疎忽になり易き者で御座いますから氣を付けなければなりませんそれで先づ掃きます一番さきに隅の方とか器物の置いてある所などをはきそれから器物は元のところに置き直しまして殘りの部分をはくので御座います其はき出しました塵埃は掃き下てしも宜うし御座いますけれとも掃き下せば矢張りそちこちに塵埃が散りますから成るべく塵取にて集め取る方か宜しう御座います

箒は梭櫚箒が一番宜しう御座いますがそれについてはみで箒でございますすべて箒は眞直に立て使はなければなりません

掃き終りましたならば暫く致しまして即掃きました塵埃の靜まりました後床敷居鴨居棚窓緣などを拭くので御座います。この時用ひます雑巾は度々洗ひましてそれを堅く搾り力を入れて拭かなければなりません雑巾のしぼり方ゆるき時は折角拭きました跡に水溜りが出來恰度水を流して洗った樣になりまして部屋の中はしめり拭きました爲めに却て余計に塵埃をつける事になります。又塵埃のたまりし雑巾をよくも洗はないで拭きますと緣や敷居などの隅に塵埃が殘りまた拭きました跡に班が出來まして見にくう御座いますから前申した通り雑巾はよくよく洗ひ堅く搾りて使はなければなりません

疊の表換を致しました時には疊表は土の粉にて

眞白になりて居りますものですから穢れません雑巾を水でよく洗ひまして堅く搾りて拭くので御座います若しも拭かないで其上に座りましたならは着物も足袋もすぐ穢れて仕舞ひます

極清潔を望む人でございますと戸障子まで拭きますがかういふ所は洗ひ出しました雑巾では障子の紙を破りまたふきました所丈色づきまして手が届きませんで拭けなかつた所と目立ちて際づきなど致しましてみにくう御座いますから燥きました雑巾を使ひます方か宜しうございますこの乾きました雑巾と申しましても種々ございませうがツャプキンと申して賣つて居りますものがございます是ならは結構と思ひます

ガラスを下きますには軟かな布片が一番宜しうございますしかし若し布片にて拭きましたばかりで奇麗になりませんならはアルコールを少しつけて拭くので御座います

すべて人の家は塵埃の出ますもので御座いますが一家の内でも一番澤山に塵埃の出ますのは臺所でございます何せかと申しますと食物を拵へます爲に使ひます野菜物などより澤山の屑が出て參ります又火を燒きますとほこりか立ちますから度々掃除をしなければなりません東京などでは家毎に塵埃箱を作ることになりて居りますから屑さへ出ますとすぐにその箱の中に入れ臭氣かたちませんやうに蓋をしておくのでございますしかし塵埃箱の設けのない所では家の周圍に塵埃溜を拵へまして其所へ捨てますが時々塵埃を運び出しまして掃除を怠らないやうにしなければ衞生上害になります又此塵埃溜には屋根を作る事か必要でございま

す雨が降りますと其腐敗致しましたものに雨水がかゝりまして不潔な汁が地面の中にしみ込みますからそれを防ぐので御座います

則は不潔になり易き處でございますから拂塵箒雑巾箒を別に供へおきまして掃除を怠らないやうにしなければなりません

日本では昔から夏冬の二度或は歳の暮に煤掃きと申しまして家の中の道具疊建具まですつかり出しまして大掃除を致します是は誠によき習慣でございます併し此大掃除を今一層度數を殖やしまして學校などにて致しますやうに二月或は三月に一度位日を定めて致しましたならば宜しからうと思ひます

昨日といひ今日と暮らしてあすか川
流れて早き月日なりけり

今昔いろは料理

石井泰次郎

（ぬの部）

ぬたあへの拵やう　古法

酒のかすを能く擂盆にて摺て、大豆の粉を入れ、花かつをを摺りて搔まぜて、魚に酢をかけてあへるなり、何の魚も同し仕方にてよし

又は大豆の粉なき時は、けしか、胡麻かを入て、糟と酢と酒とにてあへる

又青くするには、蓼なとすりまぜてよし

大きなる魚は中うち（中のほねつぎの身）を燒て入るゝもよし

○花かつをとは、かつぶしを正身ばかりにして、小刀にて細くけづりたるものなれど、こゝにてはたゞ鉋にてけづりたるをすりばちに入てすりたる

なり

同　新法

葱を能くあらひて剖きて寸ぐらゐに切て、若布を水にあらひ湯にてもどし、みち（すぢの事）をとり去り指にて摘みて小さくして、まぐろを能き程に切て、以上の三種を醋に漬けおき、よき味噌に砂糖を入れまぜて、すりばちにて能くすり、右の三種を酢よりあげて、酢をきりて、これに入てあへるなり

（るの部）

るりやき鯛の拵へかた

鯛の切身に、玉子の黄味をねりてやくなり、

或母の日記（第四回）

無名氏

明治三十三年九月三十日生れの女子生後八九十ヶ月間の記事

五月二十日　澤庵漬をあづけて下に落すも拾ひ得るようになれり。眠りたきときは兩手にて目をこすることを覺えたり。

五月二十九日　乳母車を買ひ求め日毎にのせわるく、此頃より膳の上にある飯椀を持ちあげて口にあてるやうになれり。同じ頃眼少し痛み四五日にしてなほれり。今迄は知らぬ人を見るときは泣く癖ありしが、此頃よりあまり泣かぬやうになれり。

六月五日　母につれられ糸魚川町に行き知るべのもとに二泊してかへれり、町よりかへりひるねに父のよみをる雜誌を欲しがれり、夜古雜誌一冊與へたれば喜びてもてあそぶ。

九日　母と共に上州玉明舍にて寫眞をうつせり。

十二日　他の家にて二歳なる男子と太鼓を弄ひ、二つの内各々鳴りのよきものを取らんと爭へり。

十五日　うしろの方より荷馬車の來るを見付け近くに及び右より左へ見送れり。

十七日　祖母の許へ寫眞を送る。

今月初旬より食時の傍にあり、膳を引き椀をつかみ飯びつに打ちかゝり寸時も目を放つを出來ず。

二十日　小學生徒習字の彩色畫の壁ばりせしを見て大に喜べり。

二十三日　より口の中にてルールーと舌をまわす、此頃より起きかへり上手になれり。

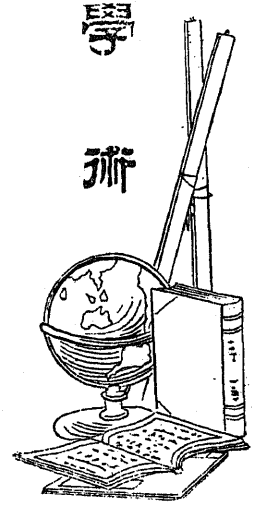
廿六日　はじめて葛湯を與へしに一小皿程食し終り尙ほしがれり。

廿七日　飯びつの傍にあり片手に杓子を持ち片手にて飯をつかみ食へり。

廿九日　二尺程の緣側より落ち、少し泣きしも別に怪我なし。子守學校或は說敎場の如き人々の集れる所に連れ行くときは大に喜ぶ。此月の末より飯をかみてたま〳〵に與ふればうれしがつて母のあごをかさふ。

七月二日　母の實家より夏のうぶぎ一襲送り來る、同時に縫ひたる赤き猿とぶちの犬とを貰ひたるも、此等の物は未だ喜ばず此時貰ひたる麥コーセンは喜びて食せり。此頃より御免〳〵と云へは顏を左右にふる事をおぼえたり。

十日　大便を失して冷水にて洗ひやりたるに、翌日より熱を出し、疳消丸三服を用ひたるも熱去らず、十三日相澤玄伯醫の診察を受け散藥二服を用ひたれば平服せり。



昆虫標品製法

驚水

孃樣や、小供さんがたの、家庭の遊び事には、色々のおもしろい事が、あるでありましようか、茲に昆虫の標品を造る事は、次漸、學問上の、智識をますと同時に、中々、有益な、おもしろい樂みで厶りまして、實際自分でやッて見ますと、色々の虫か、十よれば十五、十五よれば二十もよせたい氣持になりまして、日曜〳〵を樂しみに、自分で採集箱をさげて、青葉の頃や、枯葉の頃に、近邊の、田舍道を、ぶら〳〵と採集しながらあるき回りてゝ歸りますと、其れは〳〵、其晩の御飯のおいしい事といつたらありません、

終には、大きな標品箱を造らなければならぬ樣になりますと、其れは〳〵、實に愉快な、樂しいものでありまして、私は是れ程、有益でおもしろい家庭の遊びは、別にないと思ひます、皆さん、御ためしに、近邊のものから、二つ三つ集めて御覽なさいまし、きつとおもしろくて、やめられない樣になるに相違はありません

とても昆虫全体といふ譯には行きませんから、私は、二三年前より、蝶の採集を初めまして、早や大分種類が集りましたから、其内の、奇麗なのを、大小取りまぜて、長サ二尺、巾一尺、深さ一寸ば

かりの、ガラス蓋の箱に飾りまして、是を私の机の室に、額にしてありますと、皆さん御遊に來まして、是れは實物の額だ、とても油繪なんぞの及ふ處ではないなんて、申して御賞めになりますのが、私は大にうれしう厶ります、

六かしい事でも何でもありませんから、今日は其虫の標品の製法を、あらまし御話し致して見ようと思ひます、

先づ虫を取りますには、虫掬網がいりますが、これは、極めて簡單なものでありまして、針金を、徑一尺位にまげて、これを三尺ばかりの竹のさきにつけるのであります、そうして其針金にはなるべく綠色の、蚊帳地の如きものにて袋をつくりて、是をぬひつけて置きまして、是れにて蝶や虫を捕ふるのであります、

また甲虫の類は、通常、蝙蝠傘を、擴げまして、是れをさかさに木の下に、ぶらさげて置きますと、甲虫が、獨りで是れに落ち込みますから、其を捕ふるのであります、

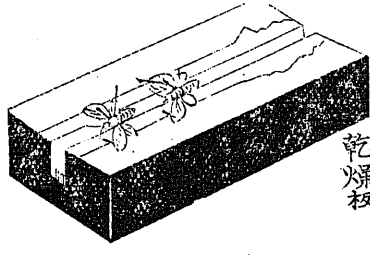
虫を殺すには、殺虫瓶に入れて、是を殺しますが、さて其殺虫瓶と申しますのは、口の廣い瓶か、もしくはコップの樣なもの丶中に、青酸加里の塊を二つ三つ入れまして、其上を、厚紙にて抑えまして、其厚紙のふちに、糊をつけて、コップの中頃にはりつけまして、そうして其コップに、コルクの栓をして置きますと、毒がコップの内にたまりますから、虫は直に死んでしまひます、

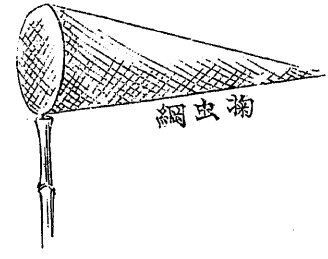
また甲虫の類は、煮湯の中に入れて、殺してもよろしいのであります、個樣にしますと、何時までも、光澤がうせずに、かびもつかないでよろしう

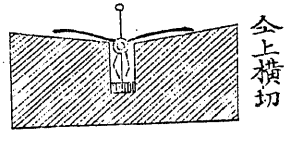
ございます、

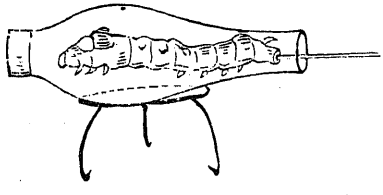
かくして殺したる蝶や虫を乾かしますのには、通常、長サ一尺、厚サ一寸、巾二寸ばかりの木片をつくりまして、其眞中に深サ七八分ばかりの縱溝を堀りまして、其溝の中に、虫の体がはまる樣にとめ針にてさしまして、其して四つの羽を溝の兩方の堤の上に擴げて、此れを絹糸にて抑えて置ましして、其の木片を柱にでもぶら下げて置けば、虫は一週間ばかり致しますと、奇麗に乾きまして、四つの羽を、チャンと擴げた標品が出來るのであります、

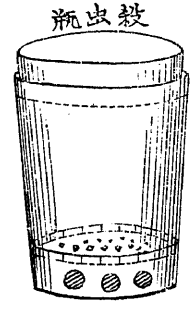
蝶の如き腹の膨れて居ますものは、其の腹をきりて、内臟を出しまして、あとに綿を入れて、斬口をうまく閉ぢて乾かします、また蜻蛉の類では、腹が非常に長くありますから、乾くにつれて、尾











が次漸と下に垂るゝ心配がありますが、此等には腹部から胸部まで、細き竹をさして置きますれば、下に曲る心配はありませぬ、

右申しました樣に、蝶蛾の標品は、誠に容易くて出來ますけれども、幼虫類の標品を造りますのは、少し面倒であります、それで大概はアルコールにつけて置きますけれども、また乾してする時もあります、

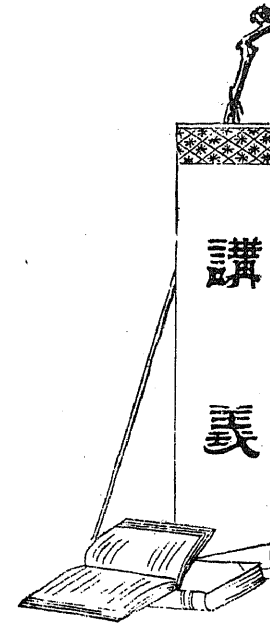
其れを致しますには、先づ其幼虫を取りまして、其尾を輕くもみ、次に頭をもみますと、虫の体内の、臟が出てしまいますから幼虫の体が縮みます、さて、其の縮みたる虫の、尻に硝子管をはめまして、糸にてしばり、此れを口でふきまして、中に空氣を通して、体を元の通りに、膨らするのでありますが、其の膨れたるを乾すには、色々の仕方があるのでありますが、其中にて、一番手輕くて、容易く出來る法を申しますれば、

今膨らかしました虫の体を、ランプのホヤの中にさし入れまして、此れを五徳の上に置きまして、下より火にてあぶるのです、

個樣に致しますと、幼虫はまるで生てる樣な形に、誠に奇麗な姿に出來るのであります、其れをゴムにて厚紙や、又はおし葉の上にはりつけて、標品と致します、

然し之を箱に入れて長く置きますと、時々虫がついたり、かびがはにたりすることがある、其時はベンツオールかアルコールを筆の尖につけて、虫の体を洗へば宜しい。又ナフタリンを紙に包んで箱の中に入れて置くのも虫やかびを防ぐのには至極よろしい。

（完）



知覺作用

文學士　松本孝次郎講演

吾々の智識の働きは感覺のみで終るとすれは吾々は外界の物体の智識を得ることは出來ない。然るに精神の性質として支離滅裂のものを統一して吾々の智識を作るのである。即ち日常外界の物体にあへば其の事々物々の姿を心に寫す而して其手段は何てあるかといふと色々の感覺器官を用ゐて寫す。故にこれは心といふ鏡を持て居て其上に色々の物を寫すと同じことである。

斯樣にして寫したものを知覺といふ。而してこの知覺をあらはす作用を知覺作用といふ。感覺作用では色を知るとか香を知るとか個々別々のものであるが知覺作用は感覺作用で知り得た所の色だの香だのを集めて一つの物体の形を作るのである。例へは今我々が卷烟草の姿を寫すにはまづ目て以て其形を見次に觸を見て其堅さを知つて其形を寫し出すのである。而して今皆さんは私を知覺して居るものである。私は今此席を去つても皆さんは私の姿を心に思ひ浮べることが出來る。この場合の私の姿は即ち觀念にある。故に知覺と觀念とは如何に異つて居るかといふに觀念の時には刺激物がなく知覺の時には刺激物が現存して居る。そうして知覺には現實的であると云ふ意識あれど

も觀念はそうでない。又觀念の時には鮮ならされど知覺に於ては鮮に知る。又通常觀念に於ては精密でないが知覺に於ては精密に見とめる。されど現在では觀念といふ語を思想とか概念といふ所に用ゐて居ることもあるがこれは一つの言葉を應用したのである。我々の智識思想は觀念の多くなるに從つて豐富となる。而して觀念を作るには知覺か必要である。而して確なる知覺は十分なる感覺に由つて得らるゝものである。

知覺作用に付ての注意

常に適當に感覺器官を働かすことは其器官を鋭敏に且つ强壯にするために尤も必要である、これは恰も經濟上で適當に資本を用ゆれは財産を增すと同じ事である。そこで左に注意すべきことの二つを述へませう。

一、一時に成べく多くの者か知覺し得る樣に練習するを。知覺が鋭敏になれはなる程一つのものを知覺するに多くの時間を費さゞるに至る。即ち知覺の鋭敏な人が玩具店などを見ますと一目して同時に多くの物を知覺することが出來る。子供を教育するには同時に多くの物か知覺し得る樣に教育しなければなりません。而してこれがためには其機會を與へることか心要である。米國にハフディンといふ手品師がありましてこの人は其息子の知覺作用を練習する爲に其子を多くの玩具を有する店の前に連れ行き自分と競爭的に同時に多くの玩具を知覺することの練習をなした。而して同時に四十の玩具を知ることを得たりといふ。子供に遊嬉をなさしむる時に斯樣な點に大に注意することは必要である。

二、一つの物に付て極精密に知覺する習慣を作ること。一の物体を知るに只其大体のみを知るにあらず。悉くの方面から出來る丈多くの感覺に訴へて種々の方面によつて知覺しなければならぬ。通常人は目丈にて知覺して以て足れりとなす。これは大人は已に經驗によつて目て見た丈で其堅さ等を知ることが出來る。しかし子供は大人の樣に經驗がありません。決して大人視してはなりません。故に同一物を出來る丈け長く經驗せしむることか必要である。これには或は興味を失ふかの恐れあれど教師は度々發問して子供が未た注意し得さる點を指摘して知覺せしむれば興味を失ふことなし。特に動物植物鑛物等を觀察せしむる時に色々の方面から十分に觀察せしむることか必要である。右に述へた如く知覺作用を練習するには以上の二ケ條が必要である。而してこの習慣を作くる基礎は幼稚園の仕事である。故に平生注意して知覺作用を練習し得る樣に習慣をつけざるべからず。これには實物教授が固より必要であるが專らこれに重さを置く必要はない。只教師は常に「學校の門の前には如何なる木かあるか」「學校に來る途中に於て如何なる店を見たるか」「學校に來るには幾何の時間を要するか」等の問を絶えず出して子供をしてこれに答へしむ。斯くの如くなす時は自然に知覺することの習慣を得るに至る。總て日本の子供には斯の如き習慣乏し。故に我々は蟬を持てる子供に向ひて其羽の數及足の數等を問ふも容易に答へ得す。子供の知覺の如何を檢するには彼等の見た物に付て畫かしめることが適當である。余の經驗によれは人、馬、時計なとに付て畫かしめる

をか適當なり。即ち其畫きたるものゝ精密の度によりて知覺の如何を知ることが出來る。しかし茲に注意すべきことがある畫をかくには記憶作用を要す。又筋肉運動の發達を要す。

（子供によりては時計の針を三四本畫くものありこれ其數を呈はすにあらずして其運動を示せるものなり。人の形を畫くにも其觀察の異るに從つて各差あり例へば目を畫くに一〇〇等の變化あるが如し）

概して云へは多く實物を見て經驗する場合の多きに過ぐるものは精密なる觀念を持たず。斯樣な人は上流社會の子弟に多い。何となればこれ等上流の子弟は多くのものを淺く經驗する故である。而して我々の誤りやすきことは子供が其內容を知らさる言語を知るを以て其言語に對する精確なる觀念を有するものなりと見なすことである。これは尤も注意すべきことである。子供は只言語丈知つて其內容を知らぬ者が多い。故に幼稚園では子供の知つて居る言語に付て其內容を知つて居るかどうかを撿することが必要である。勿論永く度々斯樣な方針を取るにも及はぬされと或程度までは大切である。而してまた或る實物を示すときは知覺すべき點を指示して知覺せしむべきである。例へは一つの動物を示すにも只何處となく知覺せしむるのでなく目を見よ足を見よと指し示して知覺せしむる類である。斯樣なる知覺のしかたは只獨り子供に必要なるのみでなく大人にも亦必要である。例へは人の顏を記憶するに先づ其特徵を知り次に他の點に及ふか如き方法を取るときは早く記憶し得るが如きものである。又實物に付きてはまづ物質、色、形、大、位置、動靜、用方等に付て知覺すべきである。又茲に注意すべきは人は實物

に由りて確なる知覺を作り得るのみならず、實物を畫きしものを見て實物と同しく理解し得る樣にせさるべからず。これ子供自身をして自ら經驗せしものを畫かしむると共に教師も亦實物を畫きたるものを示すべきである。幼稚園では其必要を認むること少きも地理の教授等には大切である。余り模型のみを重んじて教授する時は地圖などを利用することが出來ぬに至る。要するに知覺と圖畫とを連絡することは大に務むべきことである。

以上述べ來た樣にして知覺すれはする程觀念は多くなり智識は多くなる。而して其知覺が精密となれはなる程智識は精密となる。

幼兒は自ら働いて知覺せんとするものである。こは其神經系統の勢力が發達をして余分にあるに至れば初めて活働力が發するものである。即ち子供が身体が病氣をして居る時に活働力の乏しいのを見ても明である。そうして其勢力は疲れ易くわれども亦直に回復するものである。故に知覺作用をなさしむるに余り長時間にわたるは不可である。知覺する時間を短くして其後に少しの休を取ることが適當である。而して子供をして活働力を滿足せしむることは子供に取つては非常の愉快である。

要するに知覺作用は早く發達するものなるを以て幼稚園時代及家庭時代に於ては系統を立てゝ知覺を發達せしむることが必要である。

ある女教師、兒童の算術問題を解き終ぬるを見て、もどかし相に『まー〳〵なぜそんなに出來ないだろーねー。私なぞの子どもの時は、もつとずん〳〵出來ましたよ』すると兒童はぬからず「そーでしょー　其代り先生も違つてたでしょー」

史傳

野村望東尼（續き）

下村三四吉

かくて、晋作は、望東のために、下關の豪商入江和作の茶亭を借りて、ここに寓せしめ、懇待慰安至らざるところなかりき。此間の消息は、尼が郷人におくりたる書簡中に詳かなれば、左に引かん。

高杉のはからひにて。此頃は、入江和作とて、大正義の町人の許にかくまはれてなん。誠にゝゝゝ

しかも好事魔多く、憂患つぎて來る。晋作は、その後程なく病氣に冒されて病臥の身となり。久しくして癒えず。望東は、この間絶えず病床に侍して、湯藥を進め、看護怠りなかりしが、その効もなく、慶應三年四月十三日晋作は終に不歸の人となりぬ。年僅に二十九。望東の悲痛おもひやるもなか〳〵をろかなり。

さても、征長の幕軍敗れしより、天下の形勢はここに一變し、薩長の二藩は相連合し、兵力を以て幕府を倒し、王政復古の事を擧げんとし、諸將次第に兵を率ゐて東上の途に就けり。この時望東は下關より來りて山口に在りしが、夙志の漸く達すべきを喜び、歌を以て、進發の諸將を送りき。

その一

山田大人（○即ち後の）いくさつかさをして出でたまふを

みよのため、いくさひきゆくものゝふに、
老が心もたぐへてぞやる。

己にして、九月下旬に及び、尼は三田尻に來りて豪商荒井致知の家に寓せしが、このたびのいくさの勝利を祈らんとて、一週日間宮市の天滿宮に參籠し、毎日歌一首を詠じて、これを納めぬ。その歌詞雄渾にして、憂國の至情外に溢れ、丈夫もなほ及ばざるの概あり。中につき三首を錄す。

あづさ弓ひく數ならぬ身ながらも、
ふもひいる矢は、たゞに一すぢ。

みちもなく、亂れあひたる、難波江の、
よしあしわかる時やこのとき。

九重に、八重ゐる雲や、はれんとて、冬たつ空も、春めきぬらん。

十月初旬より、望東はふと風邪に冒されしが、老體といひ、且つは、囚獄に一年の痛苦を忍びし後なれば、病容次第に不良に傾き、その十一月六日に至りて、

ふもひふくこともなければ、今はたゞ、
すゞしき道にいそがせたまへ。

との辭世の歌を詠じ、六十二歳を一期として、永眠に就きぬ。

望東尼の長逝に先だち、十月十四日、德川十五代の將軍慶喜公は、既に大政返上の事を請ひ、つぎて十二月九日には、いはゆる王政復古の大號令は發せられ、彼れが生前に憂慮せるところは實行せられ、明治の盛世を見るに至れり。望東尼若し地下に知るあらば、歡喜いかばかりぞや。明治二十四年朝廷命じて望東を靖國神社に合祀し、つぎて正五位を贈られたり、嗚呼この忠烈の偉婦人死して餘榮ありといふべし。

故中村正直先生嘗て『日本列女傳』に叙して曰へるあり。「余嘗て謂へらく、婦人の平時に良妻たり善母たるもの、不幸にして、禍に遭へは則ち烈婦節母となり。譬へば、薔薇花盛に開き、暖日蕩漾すれば艶光軒に映じ、春風披拂すれば濃香庭に滿ち、揉碎壓搾して香水となすに至るに及べは則ち芬烈緋馥、衣裳に薫り簾帷に透り、久しきを經ても歇まざるが如し。蓋し、境に順逆あり、命に吉凶あり、その良妻善母となると、烈婦節母となるとは、二あるにあらざるなり、異なる所以は、遭遇これをして然らしむるのみ。……正直曰はく、人生の遇ふところは、蓋し順逆の二境を出でず。且く婦女を以てこれを言はんに、幸にして無

事の日に遇へば則ち、貞靜已を守り、勤儉家を持し、夫の內助となり、子の儀範となり、不幸にして、艱難の際に當れば則ち、心志を剛堅にして、品行を扶植し、善く辛苦に耐へ、久しく艱難を忍ぶ。これ有識者の世の婦女に望むところなり。……良妻とならざれば則ち、烈婦となり、善母とならざれば則ち節母となる。これに一あらば、芳香芬烈の邦國に流播するもの、それ必ず遠からん。」（○原漢文）と。讀者望東尼の傳を讀み、しかる後、右の中村先生の言を反覆玩味せば、蓋し大に得るところあらん、余か本傳記述の趣旨も從て自ら明かなるべしと信ず。

（完結）

（附言）望東尼の事蹟傳ふべきもの甚だ多し。余は、本篇に於いて、たゞその大綱を擧げたるのみなるが、なほ本誌數號の紙上に亘れり。余が精彩に乏しき記述は、讀者の倦厭を招きしこと少からざるべし。是れ余が深く謝するところなり。さて、望東尼の詳傳はこれまでまとまりたるものなかりしが、三宅龍子氏（花圃女史）の手に成れる詳密の傳記『もとのしづく』の標題を以て、不日金港堂書籍株式會社より出版せられん筈なりと聞く。豐富なる材料に據り、女史特得の流麗なる筆致を以て記述せる該書は、定めてこの稀世の女丈夫が面目を躍如たらしむるものあらん。序に先容をなして讀者諸君に報ず。

文苑

天長節に友を招く

池田愛子

しつたまさいやしき身もけふのよき日にもだしてやはべらるへき男のすなるうたげなとはさてこそあれ親しき友とちうちつとひつゝあるはすま琴に千代の調をこめあるは菊の花によせて君をいはひまつらんはいかに心ゆくわざにかはへらむうからやからの誰かれも來あひ侍りたゞいもとの君のこゝもとにおはせぬのみいふかひなう口をしうなむいかて萬の事をさしおき給ひて御車まけさせ給ひてやかしこ

公德唱歌（其三）

學校の詩人

鬼さんどこへさう來りや逃る
つかまりや鬼よ輪を出りや鬼よ
輪を出た鬼はいけない鬼よ
さあ〳〵皆にわびして鬼よ

同上（其四）

たこ〳〵あがれあがればはめる
くるッちやだめよおちればだめよ
こゝらの野には電信はないよ
あげてもよろし遠慮はないよ

（完）

四季

小林恒子

いつかまつ春返り來て　野邊はたんぽゝすみれ花

木末は花の得たりがほ　いざや歌へよ鶯よ』
昨日の雨は今朝はれて　庭はあやめに杜若
池はをどれる鯉のむれ　いざや泳よわく子らよ』
錦衣よそほふ龍田ひめ　われらを待るあの姫と
こき紅の衣をきて　いざや遊べよ小女らよ』
まどの光におどろきて　見れば嬉しき銀世界
雪をまろめて戰を　いざや始めん同胞よ』

遊漁　東くめ子

芝の浦邊にしば〳〵も　ふろす手操と引く網と
何れも今日は滿潮の　舟にも余るうをのかず

子　佐々木信綱

海見ゆる窓の手すりに寄りそひて
幼なはらから白帆かぞふる
賤がやのせとに遊へるにはとりの
中にまじりて遊ぶ子らかな

花かけの芝生にねふるをさな子の
夢をまもりて舞ふこ蝶かな
川中におきならべたる石のうへを
飛び〳〵こゆる里の子の群
うせし子が遊びし森の草のはな
またこの春も花さきにけり

篠崎

よその子は學びさかりの年頃を
一人のわ子にしゝみ賣らする

雪田士雄

都より世つきのをの子歸り來て
手いれとゝのふ村をさの家

佐藤朝惠子

子らは皆かへりゆきたる學ひやの
夕べの庭にさくらちるなり

松島をとひて　布士の舍

松島のどろ水灣はさておきぬ
一眸千里松島の景

沖を見よ風ゆたかにして海ひろく
　ささちる波に花のかをりあり
引き汐と畫とはみるかひなみの上の
　月こそよけれまつしまの灣

竹柏園歌會十月兼題

霧

野も山もつゝみかれたる朝霧の上にそばだつふ下の大嶽　伊藤梅子
霧こめて千草の花はつゝめどもつゝみかれたる野邊の虫の音　増山三雪子
七艸の色もほの〴〵みえそめて明けはなれゆく霧の中道　末松生子
旅人の駒の鈴音聞ゆれど驛路はみえず霧にかくれて　板倉止子
落椎をきそひて拾ふうなゐらの聲をのこして霧たちわたる　板倉藤子
梓弓や口や何方おぼつかな霧たちわたる玉川の里　安藤菊子
なにがしの畢繪ににたりうす霧のみほりの松をつゝむあしたは　萩野愛子
朝な夕なむかふ岡べのこすゑまで洗みはてたる霧の海原　徳富久子
おるがごとき人の往來も見えわかず朝霧ふかしろんどんの市　佐藤朝惠子
あしの海ほの〴〵見えてはこれ山八重たつ霧も今はれんとす　大竹いせ子
友どちは霧にかくれてみ山路をひとり旅ゆくこゝちこそすれ　松井とも子
立こむる朝霧の中に鳥なきてねむりし村は今明けんとす　松浦島子
かへり見ればわれをおくりこし我友の面わもみえず霧ふかうして　淺井鐵子
霧こめてやまぢは見みすさをしかのこゑする方やたかれなろらん　中村文子
海山を一つにこめし朝霧もつゝみかねけり天つ日のかみ　坪野柳子
なく鳥の聲もほのかに榛名の海うな原暗くさりこめてけり　小林しげ子
わが先にゆく人やたれ霧の中にをり〳〵聞ゆしほぶきの聲　池田愛子
荷おひ馬のすゞの音のみ高くして朝ぎりふかし山の下みち　鈴木光子
　長谷川柳子

歸り行く君のゆくへをみおくれば霧にかげなきこの夕べかな　有賀はる子

霧をおひて朝立いできりをおひて夕べたち歸る山のべの庵　久保花子

岡のべのさ霧の中を朝ゆけばゆめ路をたどるこゝちこそすれ　吉田靜子

玉川のきしへの柳みるが中に霧の底にも洗みゆく哉　加藤ひな子

はなもなしもみぢもいまだそめあへずみ山をかくす峰の朝ぎり　藤平雪子

吾つまが歸り來ますゑ夕霧の中ゑりもるゝ舟唄の聲　慶野華子

軒端より霧たちこめてわが山も向の山もみえずなりにけり　倭文子

かたりあふ舟子の聲もたつ霧にしめりてわかず大利根の水　佐々木信綱

千草みえず旅人みえず夕ぐれの十里の廣野たゞ霧の海

小春日や足發洗ひ居る貧書生　移雪

小春日や遊女物縫ふ格子窓　松軒

衝立に虎描きたり大火鉢　二樓

赤鞘の浪士に出逢ふ枯野哉　弦月

小春日や鯨見にゆく女連れ　郊外

白鞘の床の刀や水仙花　樓

頭巾にて涙をかくす女かな　鼎山

泉水を覗く鶴や冬の月　稻村

冬月や鼻息しろき鑑鈍賣　春浦

小便に行く時二時の鐘冴ゆる　芝水

鰒賣の鰒ともいはで來りけり　桑眺

冬の月叩かば玉の音やせん　圓侏

寒月や鐘樓堂の鬼瓦　鬼水

方一里人にも逢はず枯野原　杏子

六助が垣に干したる布子かな　禾鰯

煤掃に和銅開珍ひろひけり　武骨

榾焚て曷士の股火や荒蕎　龍鼓

赤帽や吹雪の中を三百騎　旭子

旅僧の頭巾あやしき時雨かな　玉浦

草屋根に夕日の殘る小春かな　千歇

燒き芋を喰ふ下駄番や寒き夜　涼月

茶筌作る信濃が家や水仙花　聽瀧

唯一騎猪野驅け拔く吹雪かな　笛水

星光る乾の方や冬の雲　孤堂

置床の蕪村の軸や水仙花　乙村

惟然坊樂も苦もなき師走哉　鵬堂

風吹く櫻落葉や谷間より　春洞

冬ざるゝ古道具屋の埃りかな　綠坡

初雪の見越の松や屋中門　木公

歲末の辭

烏兎まことに匆々、春を送りて夏を迎へ、秋稍深くなりて冬來りぬと思ふ間に、何時しか年の暮は來りて明治卅四年は、はや逝かんとす。

年ごとに同じことはいへ、年の最後の一ヶ月はまことに忙かはしきもの、わけてお役所は事務の取り方附けに忙がしかるべく、實業家は一年中の損益利害の決算に忙がしかるべく、學生は學期試驗に頭を惱まし、やがては溫かき故山に歸省の準備に忙がしかるべく、家々の主婦は歲暮のやりとりよりお寺への供物、偖は煤掃ひの用意に加へて將に來らんとするお正月の子供の晴衣の見立やら、凡そ何から何までに忙がしかるべく、而して氣速の媛君たちはこゝかしこに既に骨牌取りの練習に忙がしかるべく、要するに、こゝ一月といふもの男といはず女といはず、官吏といはず實業家といはず、敎師といはず學生といはず、如何にして行く年を送り如何にして來らん年を迎へんかの爲に誠に忙がしき月にてあるなり。

然れども、茲に行く年を送りて新しき年を迎ふるが爲に、吾等の最も忘るべからざる用意の一あり。徐ろに過去一年間に於ける一身の歷史を顧みて其精神界の進歩と退歩との決算勘定之なり。吾等の學問に於て、吾等の德操に於て、はた世の爲

に盡せる吾等の事業に於て、如何なる進歩をなし如何なる退歩をなしたるか、言を換ふれば、如何に吾等は人としての理想に近づきしか遠ざかりしかを決算し、かくて其差引勘定を考へて、更に對新年の策を劃すること即之なり。

過去一年間、大に進歩發達して、着々として理想に近接せし事を發見せんか、正に滿腔の喜を以て過去を送り、更に一層進歩の期望を來るべき新年に屬して之を迎ふるを得べし。若し夫れ事毎に失敗の跡を尋ね、事毎に退歩の證を得んか、將に大に奮つて來るべき年に向つて、恢復の望を屬して之を迎へ、かくして過去失敗の一年を以て、新年に對する良好の興奮劑として之を葬むるを得べからん。

此の如くんば、明治卅四年は逝けりとて、吾等は之が爲めに更に年一つを重ねて、一歩墓場に近く進みたりとて、若しくは總べて浮世の利害損得相償はざりきとて、敢て逝く年を歎げくを要せず、毫も去る年を惜しむを要せず、一年といふ毎年全じ樣に繰り返へす吾等の全生涯を劃する假想の一線は、やがて吾等をして人道に近つからしむる爲め、吾等をして理想を現實ならしむる爲めの、極めて有力なる一階段となるべし。

希くは年の終りに望み、總べての世俗的忙がしさを片付けて後一夜、吾等をして徐むろに吾等の過去一年間に於ける精神的方面の進歩發達の跡を尋ねしめよ、これまことに吾等が理想に近接すべき自身教育に於て最良の機會にあらずや。希くは吾等の子女をして子女相應の考を彼等が過去一年間の精神的方面に向けしめよ、これ誠に子女を

して理想を將來に高めしむる上に於て、教育上最良の機會にあらずや。

かくて一室一夜の團欒に於て、互に勵み勵まされ、以て春たち歸る新たまの卅五年を迎ふ、豈にまことに樂しきかぎりにあらずや。

行く年の惜くもあるかな增鏡　紀貫之
見る影さへにくれぬと思へば

罰に付て

（ミス、ヒユース談話の一節）

松村久子
林文子

皆樣は已に前號で、ミス、ヒユースを御存じでございませう。この女子教育大家の來朝は誠に喜ふべき事でございますから、有志の同窓生が時々集まりまして、色々教育上の質問をいたして居りますが私共も幸ひ其末席に列ることを得て居ります。そうして先達ては或る人の問によつて、ミス、ヒユースの罰に付いての御考を伺ふことが出來ましたから、其一節を御紹介いたしませう。

ミス、ヒユースは左のごとく云はれました。

教師は子供の惡には二種類あるといふことを知らなければなりません。其一は一時かきりの惡いことで、今一は永久に惡いことであります。一時かきりの惡いことは之は團体の便宜のために一時定めた事例へは一定の時間に一定の場所に集まらなければならぬ、又は或る一定の時間内はだまつて居らなければならぬとかいふ樣な事を守らぬのをいふのであります。なぜ之等が一時の惡い事であるかといふと、たとへは物をいふといふ事は

いつでも惡いのではなくつて言はれないと定めた時に言ふたのが惡いのであります。又今一の永久に惡い事とはたとへは人を殘酷にするとか、虛言を吐くとか、人として決してしてはならぬ事で道德上の惡をいふのであります。

さて、教師はこの二種類の惡に對して如何に處置すべきでありませうか。一時の惡い事ならば團体の約束に背けばこういふ結果になるといふ事を皆が明に感ずる樣に罰を初めから定めて置くがよろしい、たとへば遲刻すれば殘すとか、又は無言で居るべき時に物をいへは言つていゝ時にも言はせぬとか、靜止すべき時にさわげばうごきたき時にも動かさぬとか、自分が團体の約束に背けば自分か不便を感じなければならぬ樣な罰をきめて置くのであります。そうして其惡と罰とはよく結び付けておくのが必要です。たとへば集るべき時に五分おくれたらば廿分殘すとすればある子には十分、ある時には十五分といふ風に罰をかへずに何時でも廿分殘すのであります。又仲間と共に事をする快樂を知らせる事が必要です。故に團体の約束に背けば團体と共に或る快樂を取る事が出來なくなる、つまり自然に仲間と其子との間の關係が快樂をもつて結ばれなくなるといふ事を感じさせる事が必要です。

次に永久に惡い事即ち道德上の惡に對しては之を罰するのでなくて良い方に導くことか必要であります。

道德上の惡に對しては一時の惡の樣に罰を加ふべきものではなく感化といふ事が必要なのであります。子供が道德上の惡をなすときは能く其原因

を考へて先其原因を除いてやる事に專心盡力しなければなりません。たとへば卑怯から虛言を吐く子があつたならば之を勇氣ある樣にしてやるのであります。又ある場合に惡をする兒を一室に呼んでまじめに其惡の惡い事を言ひきかせ之をなほさんとするの勇氣を與へ、又其方法を覺らして時には子供自身をして其惡に對する罰を提出させるのもよろしい。即ち子供に向つて此後若し斯樣〳〵の惡をしたならは、どういふ罰を與へようかといつて子供をして其罰を擇はせるのであります。

又或場合には例へば人を傷けたらは之をいたはつて世話をさせるとか、人の物をこわしたならば之をもとの樣にさせるとか、つまり子供をして自分の惡を償はせるのもよろしい。最も多くの場合には惡をする原因を除くのに盡力すべきでありますが、他の方面では子供の七才位迄意志の薄弱な時代には大人がこれは面白いとか、これはよいとかいへは直に其方に向き易い性質が子供にあるのを利用して子供のして居る惡から離させるのであります。例へは喧嘩をして居る子供があつたならばそれに對して喧嘩をするなと制せずに他の方に心を向けさせるのです。一体喧嘩をするのは子供の自然で、これをするのは惡いといふ事がわからす面白半分にする事もあります。斯樣な時代には言ひ聞かせてもだめですから、其活動力と興味とを、もつと高尚な方に向けてやり、其理由がわかる樣になつてから惡であるといふ事を覺らせる方がよろしいのであります。即ち直接に其惡を制せずに間接の方法によつて善に導くのであります。要するに、子供の道德上の惡に對しては罰するよ

りは良い方に導くべきものであります。

以上は罰に付てミス、ヒユースの全体の御考でございますが、なほこまかい問に對して次のやうな御答を承りました。

子供が道德上の惡をした場合に子供自身をして其惡に對する罰を擇ばせるといふことは幼稚園の幼兒などにはとてもできますまい。けれども其惡をする原因を除いてやるといふことはできませう。且つ又之が幼稚園時代に最も必要な感化であります。

團体が道德上惡い事をした場合に團体をして罰を擇ばせるといふ事はよくありません。もし團体に多くの欠點がありましたならば一つづゝ段々になほしてゆきます。さてなほしてゆきますにはまづ其欠點から生ずる結果を明に團体の子供の考の中に入れます。そうして其欠點の矯正の方法は其團体中の良い兒と相談して其良い兒が他の總ての子供に相談して罰を提出させます。こういふ場合には子供から罰を提出した後、此罰を受くるべき惡を子供がしたならば、教師は之を見落さずに其罰を實行する事が必要です。

又右のやうな場合に教師の相談しやうと思ふ良い兒が無勢力で却て團体中の惡い兒が勢力を持つて居つて妨になる事がありましたならば、教師はまづ惡くて勢力のある兒を善い方に向はせる事が必要です。一体惡い兒でも勢力があるといふのは其兒の何處かにすぐれた點がある爲です。そうして教師は其すぐれた處を善い方に利用するといふ事をしないで惡い方に其勢力をつかはせて居るのですから、教師は十分此兒に注意して其勢力を善

い方に向けることが必要です。そうして其勢力のある兒を利用すべきであります。

一体、罰といふものは罪に對する全体ではありません。即ち一遍の罰を與へたからと言つて其兒が其罪を再び犯さないといふやうものではありません。罰は只子供を善い方に導く感化の一部分であります。ですから惡い子供を善い方に導くには之を罰すべきではなくて感化すべきであります。もし子供が惡い事をする、直に之を罰して苦痛を與へるといふ事ばかりをして居りましたならば子供は其惡を再びすまいとは考へずに只苦痛を感ずるばかりであります。こういふ方法は良い感化とは言はれません。一体子供が同じ惡を再三するといふのは教師の取扱方が惡いのでありますから教師はよく自分の取扱方に付て反省しなければなりません。

又子供が同じ惡をくりかへすのは一種の病氣のやうなものでありますから教師は常に其兒の行に注意して其兒に十分同情して其兒が弱點に打ち勝つやうに奬勵するのがよろしい。そうして子供をして先生をたのんで共に進まうといふ精神を持たせなければなりません。

以上はミス、ヒユースの談話の一節でございますが、私共は之を承りまして「子供の道德上の惡に對しては之を罰しないで良い方に導くべきものである」といふこと即ち道德上の惡を罰でよくすることはできない、感化を以てしなければならぬといふ事に特別に深く感しました。

寄書

本誌第十號に掲載したる懸賞質問題「婦人の側より見て理想的の夫とは如何なる資格を有せるものなるか」といへるに對し、讀者諸姉よりの解答文、先月十五日までに寄稿せられたるもの殆んど三十篇、記者は一々愼重なる撿討と緻密なる判斷とを以て、之が撰擇をなせしに、不幸にして、折角の寄稿の中には、餘りに空漠に失するもの、餘りに長篇にして文意の纏まらざるもの、餘りに簡單にして意志の貫徹せざるもの、若しくは語氣語聲の如何にも穩當を缺きて婦人らしからざるもの等多く、殆んど失望に終らんとせし最後に到着せる左の一篇、未だ以て上乘とには至らざるも、議論の穩當なる文意の正整なる、蓋し數十篇中比較的優等と見做さるべきを以て、即之を以て當撰文となして茲に掲載し、當撰者に向つて本誌一ヶ年分(本號より)を呈し、併せて發題者に向つて本誌半ヶ年分(上同)を呈することとせり、

理想的の夫の具備すべき資格の質問に對して答ふ

京都　太田　きみ子

理想的の夫の具備すべき資格の主要なものは次の三つの他に御座りますまいと考へます、

一体格の強健
一性情の美
一専門的の學藝

是れから上記のものを細説しまして、其理由を述べます、

（第一）体格は強健でなければなりますまいと考へます、つまり骨、筋肉、血管、神經等が充分に發育して居りませんときには、熱心に充分其業務に從事する事が出來ませず、又健全な子を擧げまして、子孫を繁殖する事が出來ません。

容貌の點に就きましては、五管器の解剖的位置と、生理的機能さへ尋常でありましたら、色の黑白鼻の高低眼の大小等は論じません。

（第二）性情の美と申ますと、範圍も廣くなか〳〵六ケしふ御座りますが、兎に角親切で諸事「誠」を以て處せられたいので、つまり自分の父母妻子は異体同心と云ふ心持で皆自分の身体の半面であると云ふ考へを持てをられ度事と思ひます、いつでも此考へを持てをられましたら、藝者狂ひをするとか、或は夜遊びをするとか、又は深酒をするとか、業務を怠るとか、は出來ない事で御座りましようと思われます。

一寸其例を申して見ますると、其遊びをしてゐられまして自分は面白く樂しく遊んでゐられまして も「家にゐる妻は今頃何をしてゐるであろう？此寒ひに針仕事でもして湯を沸してさぞ待詫びてゐるであろう平常ならば、夢温さ此眞夜中に空車の音にも胸どきつかせて、起てゐたらどれ位つらい事であろう？」など考へ起されました時には、今迄の興は忽ち醒めてしまいまして直ぐに我も妻も

一つの身体である、其半面の自分の樂みは他の半面の彼の苦みであると云ふ考へが起りましよう。そうなりますと夜遊びなぞはなさらない樣になりますと共に、又「どうしたらば共に樂しみ共に愉快に遊ぶ事が出來よう？」と云ふ御考が出まして遊山なり旅行なりしまして家族を擧げて共に樂しみ平和の家庭を造る事が出來ようと思ひます。

先に申しました樣な御心掛けが御座りましたら品行は自然によく自分の業務にも熱心に從事せられまして百般之事が皆都合よく參ります事と考へます。

（第三）學藝で御座りますが是れは專門の學科を脩めて、其技藝に熟達して居られましたら、宜しいので科目は藥劑家でも、文學家でも、商業家でも、技術家でも、其何れを撰びません。

其他に財産や族籍學位等の有無は構ひません、私は儀式的或は外觀的の結婚でなしに、夫の心と精神的の結婚（心と心の化學的結合）がしたいのです、詳しく申しますと、理學的器械的の混合では第一の心の分子と第二の心の分子とが別々に存在してをりますが、化學的の結合では第一の心の原子と第二の心の原子と化合しまして一個の第三の分子を造ります、此分子から成立ちました心は最早第一や第二の分子の特性を失ひまして第一第二の兩つの性を帶びた獨立の性質を現わします。私は斯樣に夫の心と化學的の結合がしたいと考へてをります。

澁かろか知られぐ柿の初ちぎり　千代女

子供に聞かす話について

伊豫　清家　みす子

子供じやとて馬鹿にはなりません、子供には子供相應の智惠があります、殊に其時ばかりの面白半分につまりもせぬ話をして嬉ばしむるは、誠に子供にいつはりを教へるやうに思はれて、氣に濟まぬことが度々あります、それゆへ子供に聞かす話しには親たる人はよほど氣をつけませんと、とんだことになるかもしれません。

そこで私しが思ひまするに、何んでも子供に聞かす話には男の子なれば、楠正成公とか山地將軍殿とか、中江藤樹先生とか二宮尊德先生とか、また女の子なれば神功皇后樣とか紫式部さんとか、其他いろ〳〵右今にありふれた、人達の幼時を詮索して、此の人は何歳の時にかうゆう樣なことをなされた、此の人はかうゆう塲合にかうなされたと、あとから反問されても、慥かなる答辨が出來る話をしては、どふだと思ひます。

此の頃專ら童話と言ふものが大流行で、小波さんの昔噺や硯堂さんの理科童話などは、よつぽど面白うありますが、ドーモ假りに拵へた話では假令昔話にせよ桃の中からやゝが生れたと言つて、ドーシテ桃からやゝが出來たと質問したらそれは大きくなつたら分るといふか、またふ話じやものと言ひまぎらかさば兎も角、そんならふ話には無いことをつくつて詐を言ふてもよいかと、思はすやうになりはすまいか。

こんな類のふ話しは澤山あります、例へば雀が人の衣服を纏ふて人言を吐き、狸がおいこを背負ふて薪木をこり、赤顏の金時や浦島太郎が龜に乘

つて龍宮へ往いたなど、一々擧ぐることはできません、斯ふいふ話をして、なせこんなになつたであらふ、なせかうゆふ樣にするであらふと、根問せられたら何んと平たく話しませう、私しは慥な答は六つか敷と思ひます、

此の樣な話しは、今は小學校でも敎へること丶なつて、立派に修身書とか國語讀本とかいふ、敎科書ともなつてゐる都合なれば、種々御研究の結果最も適當のものには相違ありませんが、家庭での話とするにはどれが一番よきか疑ひのまゝお伺ひ申します。

御說に付きては、外國でも多少議論がある樣です何れ近刊の分に於て、此問題につきて記すことに致しませうか、夫よりも愛讀諸姉のこの說に付きて贊否の御意見が伺ひたひものです。

○上總のハ子つき歌

東京　じゝはやし生

◉正月二月、三月四月、五月六月、七月八月、九月十月、霜月師走、正月の元日に、伯母御の所へ行つたれば、お芋と大根、煮てかせて、まつと喰ひたえと、いつたれば、箸で喉つゝいた。

◉正月はいゝもんだ、木ッ端の樣な、餅食つて、油の樣な、酒呑んで、雪の樣な、飯食つて、毎日〳〵々々遊んで、こんないゝ事は、たんと無え。

◉ピイヤ、チャッピヤ。小松の山の、小枝の葉。

といろが下つて、一俵よ。

つとめよと親もあたらぬ巨燵かな　嵐雪

十二月の天地

摩訶生

海を渡り山を越し來りたる朔風は、峰を脅かし麓を掠め里を拂ひ村を拭ひてすさび始めたり。

空薄黑くかきくもりて、あなといふ暇もなく、時雨けり、慌てゝ人は走り入りけり、早や晴れにけり。變化極りなき斜に來る此時雨と凜烈類なき横より來る朔風とに、落葉は到る處にハラ〳〵と散りまがひ野は一面の灰色となり、草は種を殘して枯れ果つるあり、力を株に貯へて仆るゝあり、さながら骨のみ立てる落葉松の林冷やかに白みて、所々に常綠樹のいたく黑みて聳ゆる、所謂冬枯の天地となりぬ。

兎、狐、狸、猪、鹿など全く衣裳更をし終て、里近く餌をあさりに出て來り、屈强なる熊は餓を忍ひで大平を夢みつゝ奥深く穴に隱れ入り、滿山凡て空しくなりぬ。唯有り、丁々斷續の反響時々寂たる空山を破つて相應するを、石工の岩切る鉄槌の音か、杣人の幹削る斧の響か、あらず勇ましき啄木鳥が其强き嘴を以て敢然として樑の太き枝に向いて働きつゝあるなり。

低く、茶の花は白く咲き、茶梅はさま〳〵に開く、高く、椿は相次きで咲き出でぬ、眼白飛び來りて頻に窺ふ。こは花より蜜を吸はむが爲なり。一塊の水仙は床の上に盆栽のまゝ咲き匂ひ、庭の一方に金剛纂しばらしく開き、頑石の側に、川岸

の蔭に、さては奥山蔭に緣濃く肥え太りたる豪吾は黄金色の力ある花盛に咲き始む、冬枯の空尙花に乏しからず。

柴賣る老爺は彼枯山より枯木の束を荷うて夕暮に里に出で來り、花鬻ぐ兒、蜆賣る童、ほの〳〵に町の中、花ェー花、蜆ャ蜆ー と味ぶ聲、いと冷に憐に聞ゆ。

十三日、夙に起きて人々ドンバタンなど勢よく打ち騷く、俗に之を煤拂ひといふ。質朴なる田舍人のやう〳〵煤拂ひ終へて眞つ黑となりて出で來りたる其肩先に初雪ポロ〳〵と降りかゝる、雪の下、麥は盛に根に生長し、木賊獨り拔き出でゝ綠一入麗はし。

廿日前後、砂糖鰹節鹽魚などの贈答始まる、廿五日クリスマスに物の交贈あり、廿六日頃より餅搗始まる、此頃鞋がけにて財布を肩に勢猛に眼を光らし東西南北駈け廻る一種の愛嬌者盛に來往す、三十日より門松を立て七五三繩を張り迎年の準備に忙はしく、やう〳〵除夜に至りて厄拂の聲をかしきを耳にする頃、世は靜に更け行きて正に午後十二時、茲に一と先づ多幸多福なりし今年を送りて、樂しき來ん年を迎へんかな。

大晦日定めなき世のさだめなり

冬至

せ、く生

歲月は流るゝが如く、本年もはや師走とはなりぬ。師走とはもと陰曆十二月の異名なるが、總べて年內の事を「爲果つ」といふ意味なりといへば、陽曆とても斯く言ひて能く當れるを覺ゆ。師走と

なりて仕果てし事は何やらん、過去の年内は嗚呼夢の如し。今に至りて萬事の忙しく、心落付かぬとて將何をか怨みん。

凡そ物始あれば必終あり、終ありて又始となるが常則なれば、此の天地の間陰陽循環の路程に於て、この師走を忙しき月好ましからぬ月なりと感ずる中にも、流石に又吾は將に來るべき年の始を待ち、物の新に榮えん樣を思ひて將樂しき望を捨つるを能はざるなり。

一年中の陰氣は茲に極まり果て、將に一陽來復となるべき陰陽交換の季は實にこの師走なり。然も其交換の當日は古來冬至と稱し、年中二十四氣の一に數へ、節日をいひて都鄙皆之を祝賀せり。此の日若し朔旦(陰曆十一月のついたち)に當る時は、殊に之を朔旦冬至と名つけ、瑞祥として禁中にも公事を行はせられし事史上に見ゆ。(曆法上二十年毎に一度は必ず此事ありといふ)。此の日太陽は天の黃道に於いて、赤道よりは最南方に遠るが故に、壯者よりは日の短きを嘆たれ、老者よりは夜の長きを訴へらるゝ年々の例にて、大抵は本月二十二日にして、本年も正に其日に當り諸學校の終業日は大方此の頃よりならむ。

貝原篤信先生の日本歲時記に「冬至は十一月の中なり、三至とて一には陰極の至、二には陽氣始めて至、三には日行南に至る。此の故に至日ともいふ。冬至の前一日に至りて、陰氣長する事極まり日の短き至りなり。又夜長き事も極まれり。日の南に至るも極まれり。今日一陽來復して後陽氣日々に長じ、日も漸く長くなる。陽氣の始めて生する時なれば勞働すべからず、安靜にして微陽を

養ふべし。閉戸默坐して公事にあらずんば出行すべからず。又奴僕を勞働せしむる事なかれ」と記され、續いて其の由來の元祖とも思はるべき說を掲げて、「○易曰雷在地中復、先王以至日閉關、商旅不行、后不省方。（復とは易の封の名なり、雷は夏の物にて今は地中に匿れて居るが、今日より陽氣に復るとなり。されば先王も此の冬至の日に諸所の關所を閉づる故に商人も旅行せず。君にも引籠られて四方の政をもみそなはせずして御祝ひなさるゝなり）

○白虎通曰、此日陽氣微弱、王者承天理物、故率天下靜不復行役、扶助微氣成萬物也○（此の意はよく通ずるが如し、即ちこの冬至の日は陽氣萌せしも尚弱し、天子は天の職を承けて天下萬物を理むる故に何事も此の日は靜にして勞役せしめず、微弱の氣を助けて萬物の生育を成さしむと。）○伊川易傳曰、陽始生甚微、安靜而後長故復之象曰、先生以至日閉關。

朱子曰、一陽初復、陽氣甚微、不可勞動。（意よく通ず。）

として尙左の一節と杜子美冬至之詩とを附記せり。

「今日饂飩を製し、家人奴僕等にも與へ、陽復を賀すべし。又先祖考妣の靈前にも獻じ、茶酒を供へ、新果をすゝむべし。」

天時人事曰相催。（天時と人事とは離れ〳〵となり、關係せざるものに非ず季節は日々人事を移し行くものなり）

冬至陽生春又來。（意よく通ず）

刺繡五紋添弱線。（繡といふ織物に糸を刺してみれば、人には少しも感ぜざる陽氣が其の五紋に弱線を表す）

吹葭六管動飛灰。（六律の笛に葭の灰を込めて地中に埋め置いて見れば陽氣は其の灰を吹き飛はす）

岸容待臘將舒柳。（堤塘は臘月の來るを待ちて柳眉を舒ばさん風情なり）

天氣衝寒欲放梅。（人は寒氣に縮まんとすれども陽氣は之を冒して梅に芳香を放たしめんとす。）

雲物不殊鄕國異。（杜子の境遇は今天地の風景は異ならずして鄕國異なれる他鄕の客なるべし）

教兒且覆「掌中杯」。（客なれともこの冬至には愉快に一杯を傾くるといふ意。）

又冬至朔旦を賀したる事の正史に見ゑたるは續日本紀の左の一節を始とす。

「聖武皇帝の神龜二年十一月己丑、天皇大安殿に御して、冬至の賀を受けさせらる。親王及び侍臣等奇翫珍寶を奉持して之を進ず。即ち文武百僚五位已上及び諸司の長官大學博士等を引さて宴飲し、終日樂を極めて罷められ、祿を賜はるを各差ありき。是日大納言正三位多治比眞人池守は靈壽の杖並びに絁綿を賜はりたり。」

爾後代々この事絶ゆることなく、室町頃までは此の公事行はれしを正史並に諸公卿の記錄等に見えたれども、戰國となりては世の亂れと共に此の儀亦行はれず、明治聖代に至りては曆法の改正と共に亦是れありしを聞かずといへども、年中の一大段落として諸官衙諸學校を初めとし、世間一般に此の季を以て事務課程の一段を告げ、殘り惜しくも此の年を送り、又來ん陽春を迎ふべき送迎の休暇を設くるを見るにつけても、其の基く處甚だ遠きが如きを思ひて、覺束なくも斯くは記しつ。

"Today is yesterday's pupil."

今日は昨日の弟子なり

汽車旅行と道連の幼兒

ひさ子

私は十月の末に、日光山の秋を探らうといふので、滊笛一聲上野ステーションを出發いたしました。列車中には、隨分いろ〳〵の人が乘つて居りまして、思ひ〳〵の話をして居ります。あゝ何時來て見ても、汽車は一の社會をのせて走て居る、とおもしろく感じました。

さてこのやうなことを思うて居りますうちに、いつの間にか宇都宮に着きまして、上野以來の列車に別れ日光行のに乗りかへました。

ところが嬉しいことには、私の入りました列車中に、子どもが三人兩親に連れられて乗て居ります。そうして三人とも、そろつて首を窓からつきだして、何か話をして居ります。いかにも、汽車が嬉しいといふ樣子で見るだけでも、心持がよいのでございます。子ども、汽車、汽車と子ども、子どもは皆汽車をよろこぶものでございますが、こゝちよく走る車の運動、瞬間毎に變化する窓外の天然、之等が子どもの嗜好に投するのでございませう。

さて汽車は日光に向て走りはじめました。私は三人のうちの九才の女兒と話をはじめました。

まづ窓の外を走る木や、人や、向の山や、川から話をしはじめまして次のやうな問答をいたしました。但し子どもの詞は方言通に書きませう。

あなたのむうちはどこですか。
人形町のやどやでおます。
ほんとうのむうちはどこですか。
大坂でおます。
東京へあそびにいらしたのですか。
阿父さんや、阿母さんや、姉さんと一しよにあそびにきました。
けふはどこへいらしやるのですか。
日光の御宮はんへまゐります。
あなたはチー、大坂のむうちで毎日何をしていらつしやるのですか。
學校へ往て、もどつたら舞をならひに行きま

す、姉さんは舞も三味線も習てます。
あなたのおうちは何屋ですか。
御昆布を賣てますのや。
東京と大坂とどつちがれすきですか。
東京の方がすきでれます。
なぜ東京がおすきですか。
東京やと、毎日見物に行けますさかい。
東京で方々へいらしつて、何が一ばんれもしろかつたのですか。
毎日芝居へ見物に行たのが一ばんうれしれました、あたしは芝居が大好、大坂のおうちでも、いつでも皆一しよに見物に行きます。
そうですか、それではチー、あなたの一ばんすきなものは何ですか。
芝居でれます。

其次は。
えゝさもの。
其次は。
御昆布。
其次は。
もうれまへん。
東京でチー、上野へいらつしやいましたか。
大きな人がナー、犬をつれて立てやはりました。
上野で動物園といふ熊や虎の居る處へいらつしやいましたか。
そんなとこいかしまへん。
淺草へはいらつしやいましたか。
石の上にナー、おばあさんがれじぎをしてやはりました。

まあ問答はざつとこんなものでございます。まだ子どもで、そうたてつゞけに問答もできませんから、外を見たりあそんだりしながら、話しあつて居るうちにはやくも日光につきました。私は殘念ながらこの小さい道連に別を告げました。

舞、三味線、芝居、えゝきもの、一寸した子どもの話ではございますが、大坂の風俗をあらはして居るではございませんか。東京は毎日見物に行けるからすきだといふのは、あとできけば芝居の見物のことでございます。まだ九才の兒としては、何とよほどの芝居ずきではございませんか。大坂では始終見物に出かけるといふのですから、家内中皆すきと見えます。上野に居た人といふのは、皆樣も御承知でございませう、西郷隆盛の銅像のことで、淺草のばあさんといふのは、瓜生岩女の銅像のことでございます。此二は、上野と淺草で、一ばんおもしろく感じたのでありませう。此兒の觀察點が分るではございませんか。動物園のようなところへは親達は連れて行かぬものと見にます。

あゝ此兒大きくなつたらどんな娘になりませう。今頃はもう、大坂に歸て芝居にでも行て居るかも知れません。

小さな子どもの芝居行、之はよほど考へものでございませんか。

Wem nicht zu raten ist, dem ist nicht zu helfen.

忠告して聞かざるものは助くるに道なし

益軒先生の年中家事

下村生

貝原益軒先生の、學問も德行も兼ね備はつて、近世稀なる大儒であることは、だれも承知致してゐりますことなれば、別段ここに申しません。先生は、漢學者でありましたが、廣く人を導くために、婦女童蒙にもわかるやうな極めて平易の國文で、修身衛生などの書物をいろ〳〵書き著はされたのは、非常な實益を世間に與へたことと思ひます。私は。今年の夏期休業中に、九州の方に旅行を致し、福岡にも立ちよりました節、同地高等女學校在勤の廣島照子のきみの紹介で、貝原先生の遺族の家を訪問しました。それは、博多の瓦町といふに在つて、當主の方は、名を寛一と申し、益軒先生からは十代目とのことです。その折は、丁度幸に書物の虫干をしておられて、益軒先生の少い時分からの拔書や、著述の草稿や、日記やら、その外書入本などが、澤山出してありました。許しを得て、自由に、凡そ半日ばかりの間、あれやこれや調べて、大いに益を得ました。それ等のうちに、『年中家事』といふ標題の先生自筆の小冊子がありまして、月々に分けて、家内にて執り行ふべき重なる事柄が、かきのせたものです。その十二月の分の中に、

拂煤塵事、今月中旬天氣温和の日可也、下旬は過擾也、不拘日期、前日より器物をうつし、こもを取出し、篠竹の節ひきさきを筋をこすり、長さ四尺はかりにして、二本可備、たたみたゝきなり、煤拂時井をおほふべし、雨戸の外に盜人の可取物を不可出、又拂時戸障子な

ど障子悉く開くべし、奴婢に各新草履一足可〻與、上さうりなり、わらんじはあしく、是れかねてより作らしむべし、此日鷄鳴より起て、夜中に食し、早く拂しむべし。

との一節あり。細末のことまでよく注意の行きとゞきたるさま、從て家内の行事のきまりのよかつたことは、これで十分察せられます。序に、二月の條下の下男下女にかゝる一節をも左に記しておきませう。

（上略）買奴婢良法必是を守るべし、此月奴婢を買ふに心を虛にし、舊年より所使の奴婢を可〻逐や否を決し、又今年可〻買者の長幼と、才幹能否の品を能定め置、買時に臨で所豫定を變改すべからず云〻、

他の月の分も、おほかた、この類の事柄、右のやうな書き方です。何によらず躬行實踐をもとゝして重んぜられた先生の樣子が、この一書でも、あり〳〵とするやうな心もちが致します。

かやうな君子のつれあひとなつて、うるはしい家庭をつくられたのは、初子と申し、東軒といふ號でした。初子は、同じ筑前國夜須郡秋月の江崎廣通といふ人の女で、學問もあり、文筆にも長じて、夫の著述を助けられたことも多いのです。實父の廣通は、和漢の一通りの學問に通じ、手跡も立派で、私は、貝原氏にあるこの人のかかれた古今集の序を見ました。初子も書が上手で、隷書はことに巧であつたさうです。初子の傳に、「最隷書に工にして、清遒古雅、婦人の手に出でざるものの如し」（原漢文）とあります。初子の書かれたものもいろ〳〵ありました中に、『主譜』『俗謠』などは珍

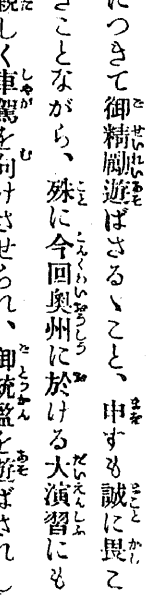
しいものであります。益軒先生も音樂の嗜みあり、初子も琴の名手で、時々は夫婦合奏して樂しまれたことが日記に見えております。なほかれこれ記したいこともありますが、題外の餘談ですから、ほかの時に讓ります。

（完）

ながらへて花をまつべき身ならねど　大石　義雄
なほ惜まるゝ年の暮かな

Forget your past Circumstances, whether they are Sorrows or joys.
The one is not without remedy, the other not perfect. Both are past; why remember them?

悲喜何れにせよ、過去の出來事は一切之を忘れよ
悲は癒されざるなきにあらず、喜も完成には至らず。二者共に過去に屬せり、何が故に之を記臆するか。



●陛下の御仁德　天皇陛下が別して軍務上のことにつきて御精勵遊ばさるゝこと、申すも誠に畏こきことながら、殊に今回奥州に於ける大演習にも親しく車駕を向けさせられ、御統監を遊ばされしが、泄れ承はる所によれば、演習の第二日目に於て陛下は仙臺地方幼年學校生徒の列を正して陪觀せるを御覽じられ、同校長を御側近く呼寄せ玉ひ、幼年の生徒が昨日と云ひ今日と云ひ演習を陪觀せる熱心嘉す可し、一同に行渡るやう菓物を買ひて與へよとの御沙汰を侍從武官長に命じ玉ひた

れば、武官長は直に聖旨を奉じて八百個の林檎を一同に與へたり、一同は餘りの有難さに感涙を催して暫しは面を擧げ得ざりしとのことなり、又高清水地方の人民が天覽の場所に新に道路を作り其他百般の準備を爲したるの赤誠を嘉し玉ひ紀念の爲め侍從をして一株の小松を掘取らせ之を宮城に持歸らしめて九重の御庭に移し植ゑさする事と爲し玉ひぬ、草木にまでも及ばるゝ御仁德の深さ、泄れ承はりたる臣民一同は、何れもこの天の如き御盛恩には、感泣せぬはなかりきといふ。

山階宮妃殿下の御薨去

山階宮菊麿王妃勳二等範子殿下は十月三十一日王女御分娩後產褥熱に罹らせられしが、御養療その効なく、竟に先月十一日午前五時十分を以て御薨去あそばされ同十七日御葬儀執行あらせられぬ。殿下は九條道孝公第二の姫君にて明治十一年十二月四日の御誕生に在しまし、皇太子妃殿下の御姉君に當らせ給ふ。御齡僅に二十有四。まことに御悼はしき限なり。殿下には天資英明、殊に御慈愛の御心深く、御茶の水幼稚園に御在せし頃よりも、まことに御上品にて自ら御高德の風高く御在せし由、御大患の事御上聞に達せらるゝや、特に勳一等に叙せられ寶冠章を賜はる。

●臺灣神社の御祭禮　同神社は先月廿七日鎭座御式を濟まされ翌廿八日左の順序によりて大祭御執行ありたりといふ。

臺灣神社大祭典式

明治三十四年十月二十八日官幣大社臺灣神社大祭を執行す

此日早旦神職神殿を裝飾す

第一鼓　午前七時半各參列員並宮司以下一の鳥居外定の席に參集す

午前八時勅使一の鳥居に著せられ同所にて下乘直に御滯在所に入らる

此時各參列員及宮司以下奉迎す

第二號　勅使御滯在所より社頭に進み皇族竝各參列員及宮司以下參進手水の儀を行ひ祓所に著く

（式前日の如し）

次　勅使皇族以下進て拜殿に向ふ

次　勅使隨員皇族民政長官主任係官右方幄舍に候す宮司以下神職左方幄舍に候す各參列員は定めの席に著く

次　宮司殿に昇り御扉を開き再拜拍手畢て傍に候す

此間奏樂

此間著床の諸員起つ

次　禰宜以下進て神饌を奉供す

此間奏樂

次　屬御幣物を出し假に案上に置く

次　宮司御幣物を執りて神前の案員に奉り再拜拍手畢りて傍に候す

次　勅使神前に進み祝詞を奏す

此間著床の諸員起つ

次　勅使復床

次　勅使玉串を献り拜禮

次　皇族民政長官主任係官竝各參列員同上

次　宮司以下同上

次　禰宜以下御幣物及神饌を撤す

此間奏樂

次　宮司御扉を閉つ再拜拍手畢て幄舍に復す

此間奏樂

次　各退出

奉送は奉迎の時の如し

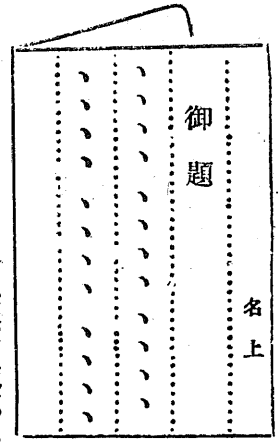
●北白川宮妃殿下の御慈仁　同妃殿下には常に御慈愛の念に富ませ給へるが、豪灘御滯在中、臺北慈善事業の基本金として金五千圓御下賜相なりたる由

●歌御會始御題　明治三十五年歌御會始御題は去る十五日愈々「新年梅」と仰せ出され、詠進書式幷に期限等、左の通り定めさせられたり。

料紙は檀紙、奉書、杉原紙又は美濃紙を用ふ

詠進は明治三十五年一月十日迄に宮内省御歌所へ差出すへし

竪詠草



裏面　某府縣下某國某郡市某町村住華士族又は平民

書式

苗字名

官位勳功爵を有する者は苗字の上に記載すべし

●女子高等師範學校保姆練習科生徒卒業　同科生徒は特に幼稚園保姆の資格を得しむる目的を以て昨年十二月の募集にかゝり、本年一月より入學を許されたるものにして何れも各地方高等女學校若しくは師範學校女子部を卒業し更に一年間研學修養せられし人々なるが、本月廿五日を以て卒業すべき見込の者十二名なりといふ。目下各地方とも漸く幼稚園の必要を感じ適良の保姆の需用頓に其聲を高め來りたる際全科生徒が專門的に斯道の研究を卒えて、世に出でらるゝこと誠に斯道にとりて慶賀の至といふべし。因に今回卒業すべき人名及府縣は左の如しとのこと

林　ふみ	山梨	富岡　むめ	東京
大島　小春	香川	吉田　まさ	香川
田邊　春	千葉	中澤　よし	山梨
中川　よね	香川	海野まみえ	香川
野村　ぎん	群馬	天野ふさよ	愛媛
澤村きみえ	香川	關　すが	新潟

●京都府高等女學校生の着袴　京都府高等女學校にては豫てより學生に着袴せしむるの可否につ

き調査中のところ今回愈着袴せしむるに決定したるよしなるが右につき河原校長の語れるところ左の如し

近時京都に於て女學生の着袴流行せるも獨り當校はこれに倣はざるより往々當校が着袴に反對なるものゝ如くいふものあるも決して反對にあらず唯輕々しく流行を趁ふを好まざると一は利害得失を研究して後に決せんと思ひたればなり當校は久しき以前より學生衣服の今日の儘にては第一衛生上害あるのみならず運動の點に頗る不體裁と不便とありされば是非その改良をなさゞるべからずとし東京より改良服の標本を幾度か取寄て研究したるも未だ滿足すべきものなく或は運動の時間に限り着袴せしめんかとも思ひたるがこれまた實際に於て行はるべきにあらず然し種々研究の結果今回遂に着袴せしむることに決したり然るに袴の形、地質、色に至りては當時流行せるものゝみに模倣するを好まざるよりこれまた種々研究したるが形については校内に一は目下流行の行燈袴を可とするものと一はマチの小なるものを附けて裾の方に開くの形を可とする者との二樣の議ありて未だ決定するに至らざるも地質は丈夫と廉價とを主としモスリン會社のセルを用ひ色合は古代紫が宜しからんとて目下セル地に同色の染方を京都市染織學校に依頼中なればその染上りたる結果を見て確定する筈なり云々

●四恩爪生會　同會は先月十七日團子坂須藤氏庭園において秋季大會を開き、村上文學博士及法科大學教授ブリデル博士の演說あり、此日山階宮妃殿下御葬送日に當りたる故を以て餘興をなさず來會者へ粟餅、壽司等を配付して散會したりといふ。

●婦人共立育兒會　去十月廿六日錦輝館に於て第六回總會を開き弘田醫學博士の報告、總裁有栖川宮妃殿下の令旨捧讀、清浦司法大臣の演說あり終りて講談能狂言等の餘興あり出席者は近衞公爵夫人鍋島侯爵夫人松前子爵夫人始め數百名、非常の盛會なりきといふ

●東亞佛教會女子部　去月五日錦輝館に於て第十回講演を開き、島地默雷師及米國婦人マクラウド孃の講演あり孃は佛教視察の爲、久しく東洋諸

國漫遊中此夏來朝し織田得能師につきて研究中なりしが近々印度に渡航する筈なりといふ

●肺病豫防法の取調　赤痢或はコレラ等は其感染急激なるを以て人も注意し我も遠慮して殊更衆人と交通を絶つなど種々豫防に便なれども肺病に至りては感染者も初期には格別の苦痛を感ぜず知らず〳〵の間重患に陷りて死亡するを常とす故に學校、工場、官廳其他多數人の集合する場所に出入する者は終に其病毒に感染するに至り公衆衞生上事容易ならざるを以て内務省衞生局にては中央術生會議に諮問して肺病豫防法を制定し勅令を以て發表せんとの意見にて過般來取調中の處其調査も結了したれば昨今は同省參事官會議に附し居れりと云ふ、まことに尤もの事なり。殊に學校等に於ては大切なる人の子を育つる場所なるに近來該症蔓延の結果教員中にも該病患者少からざる由、一校を司る校長などよく〳〵注意せられたきものなり。尙

●肺病患者の飛沫の危險　と題して婦人衞生雜誌に次の如く記せり。

多くの人の中には常に口中に泡沫を蓄へ談笑の際身邊に之を吹き飛ばすもの少なからず、之は健康なる人でも餘り氣持の好きものにあらず、況して肺病患者などにては實に危險を感ずるゆへ吾々は斯る場合には大抵此邊へ飛ばしたりと思ふ所の疊若くは座布團を消毒し來りしが、外國にてもコニ！ゲルといへる學者は肺病患者が其恐るべき毒原を含める口中の泡沫を談話、咳嗽、噴嚏の際幾何の距離にまで吹き飛ばすかを試驗したり、即風の入らざる室内に於て或る一定種類の細菌を以

て試みしに咳嗽等によりて其人の口中より飛ばしたる細菌は七「メートル」(彼是我が二丈四尺餘程)の距離にまで達し高さ二「メートル」(六尺六寸)に達することを確に證據立てたりと云ふ

海外彙報

●自轉車の害　自轉車の流行は歐米に於ては殆んと流行の極に達し、獨逸に於ては目下頻りに其利害の研究中なるが、之に對する博士「ヘールマン」氏の報告に依るに自轉車乘車は其身体の發育を阻害し、神經衰弱を誘發し、諸學者の言へる如く心臟に障害を發起せるを證明せり。又健康の人にして小丘を登りたる後脈搏を數ふるに、平均一分時一五〇乃至一六〇搏となれり。是の如き過劇の勞働後に於ては、少くも十分間停車し休息するの必要あり。又冬期に於て口腔を開き、乘車するときは充分温まらざる乾燥の空氣、若くは不潔の空氣を呼吸するを以て上部の氣道並に肺臟の疾病を發し易く、恁して發生したる氣管支肺尖加多兒を、壯年の商人及學校教員に見たり。又乘車の際喫烟し若くは多量の飲料を取るは頗る有害なり。云々

●女子は高等教育に適するか　先々月伯林に於て所謂進歩主義の女子の大會催はされたるが開會劈頭に警吏と衝突して先づ所謂進歩主義の實を示し幷に女子に高等教育を授くるを可とする旨決議したり然るに現時獨逸に於ける學者一般の說は女子に高等教育を授くることを不可とする由にて生理學の大家なるライプシッヒ大學教授モビアスが此程著はしたる「女子の生理的無氣力と題する」書

の如きは此問題に關して大に參考すべきものなりと云ふ其書に曰く女子は男子と小兒との中間に位すべきものにして女子の智能は創造的なるよりも寧ろ受容的にして起原的なるよりも寧ろ摸倣的なり又女子は人智の發達に曾て一も貢獻したる所なし女子の專業と稱すべき料理裁縫等の事に至るまで新方法を案出したる者は悉く男子なり女子に高等教育を授くるは頗る危險なるをにして其結果は疾病を增加し多くの石胎を生じ女子の本能をして痴愚ならしむ云々と

●米國兒童に關する研究　米國華盛頓のマクドナルド博士は兒童心理の研究者として名高き人なるが此程「兒童の研究」と題する論文をエヴエリーボディース、マガジーン雜誌に揭げて華盛頓府の就學兒童二万人に就き統計的研究を爲したる結果を示せり博士は曰く總明の度に於ては男女の兒童に差なしと雖も男兒は女兒よりも不活潑なるもの五分方多しこは女兒は男兒よりも早熟なるためならん又米人の兒童は雜種兒よりも總明なりこれ離婚は善良なる兒童を得難きことを證するならん非勞働者(官吏商人等)の兒童は勞働者の兒童に優れりこは家庭の狀況兒童の智育發達に有利なる爲ならん又非勞働者の兒童は勞働者の兒童より神經質にして虛弱なりこれ生計の祐なるもの必ずしも健康なる能はざることを證するものなり多くの兒童は時々懶惰なれども或る兒童は慢性的に懶惰なり而して慢性的なるものは多く不活潑なり即ち不活潑は懶惰に伴ふものなり又懶惰なるものは女兒よりも男兒に多し御し難き男兒は女兒よりも甚だ多し之を要するに諸種の缺點は男兒に多く其原因は種々

あることならんも男兒は女兒よりも危險にさらさるゝこと多く誘惑せらるゝ場合多きためならん此事は監獄及び感化院にある男子五人に對し女子一人ある事實にても證明するを得べし然も缺點ある女子は其缺點の男子より頗る猛烈なるものなり云々と

●黑奴の小兒と暗算　黑奴を教育したる一英人の言に據れば黑奴の小兒は極めて暗算に巧みなる由にて問題を言ひ終るとき直ちに答を與へ其早きこと到底考ふるの暇なき程にして白人の小兒には及ぶものなしと云ふ

新刊紹介

●日本文典唱歌　大和田建樹作歌　小山作之助作曲　啓發社發行

日本文典を唱歌の形にして、文法を暗記するに便ならしめんとせるもの、唱歌としての價値は言はずともあらん、四十頁九十七節に渡れる歌詞によりて果して文法暗記の目的を達し得るや否や疑はし。（定價一冊拾壹錢實捌所　姫百合社）

●言文一致　言文一致研究會編纂

言文一致の必要は今更説くを要しない。世人は其必要を認めて、新聞にでも雜誌にでもこの種類の文章の載つて居ぬはない位である。本書は二百四十九頁に渡れる袖珍册子で、分つて緒論、普通用文、手紙文例、雜文、紀事論説文として多數の實例を擧げて居る、時節柄必要な書物だと考へられる（定價金廿五錢　發兌元大阪東區備後町四、吉岡書店）

●閨秀畫家經歷談　速水不染編

これ當世閨秀畫家十家の經歷談をのせたる袖珍册子口繪には畫家肖像及畫等十數葉を載せたり。（定價二十五錢）

●家庭の樂　女子の友記者編

讀んで見て「あゝこんなものか」といふ人もあらんが、去りとては中々面白し。前者と共に歲暮の送り物には持つてこいなり。（定價二十錢）

●ナイチンゲール　女子の友記者編

西洋傑婦傳の第二編として出でたるもの、慘たる戰場に於ける平和の天使を畫きて餘蘊なし。赤十字事業の漸く盛ならんとする際、

是非必讀の書たるべし。（定價二十錢）

●明治才媛歌集　編者同

女子の友愛讀者の歌集なり。各國才媛の文筆活躍。（定價二十五錢）

●話方教授の技拆　横山健三郎著

緒論を言語の發達と國民の開化とに起し、教授の目的より材料の撰擇、方法等に至る所論穩健、細密、小學校國語教授の良參考書たるを失はず。（定價二十五錢以上五種　東京市神田鎌倉町東洋社發行）

●英學新報　第一號　東京神田表神保町三番地　英學新報社發行

女子高等師範講師ベーコン、津田梅子、櫻井鷗村等の諸氏編輯せらるゝ由。從來此種の雜誌少からざれども、本誌の如き体裁整ひたるは少なし。語學教師生徒に取りて唯一の机上の友なるべし（毎月二回　一册八錢　發賣所同所東京堂）

新刊雜誌

●學生倶樂部　第二卷第二　育成會
●群星　第二卷第一　同上
●新文　第一卷第七號　言文一致會
●婦人新報　第五四號　婦人新報社
●教育時論　第五九五、六、七、八號　開發社
●女子の友　第八號　東洋社
●苦學界　第二四〇號　苦學社出版部
●女鑑　第八篇第一一號　國光社
●東洋哲學　第四卷第四　東洋哲學會
●姫百合　第一四號　姫百合社
●東京教育時報　第四卷第一號　東京市教育會
●教育學術界　第一一號　同文館
●家庭　第四五八號　家庭發行所
●淨土新報　毎號　淨土新報社
●婦女新聞　第二五八號　婦女新聞社
●六合雜誌　第三卷第三五號　日本ゆにてりあん弘道會
●日本の小學教師　卷百八四　國民教育社
●大八洲雜誌　第一篇第五號　大八洲館
●考古界　第一卷第三號　考古學界
●新著月刊　第二四號　全發行所
●日本婦人　第一四四號　帝國婦人協會
●婦人衛生雜誌　第一〇九號　大日本婦人衛生會
●うらにしき　第一七七號　尚綱社
●哲學雜誌　第一一號　哲學雜誌社
●日本婦人新聞　第一〇號　日本婦人新聞社
●衛生談話　第一〇號　通俗衛生談話會
●ちんな　毎號　大日本女學會
●牟婁新報　牟婁新報社

◎なんな	第十一號	大日本女學會
◎健康の栞	第七號	同　社
◎遊戯雜誌	第二號	日本遊戯調査會

會報

幹事會　十一月二十七日女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會來十二月七日午後一時三十分より開くへき第二十三常會の事につきて議す出席者中村主幹、清水、野口、雨森、林、松村、稲石、羽田、東の九氏なりき

入會

東京の部

下谷區
牛込區神楽町二ノ十七　根岸小學校附屬幼稚園　關谷いま
京橋區新榮町四ノ二　吉田たみ
東京府女子師範學校　神通せき
女子高等師範學校　齋藤清太郎

地方の部

新潟縣女子師範學校　村山いく
東京府北豐島郡南千住元通新四一　永田らく
大分縣下毛郡中津町字古金谷ノ丁　石島廣
富山縣富山市總曲輪　秋きん
秋田縣南秋田郡土崎小學校　歌山さみ
靜岡縣駿東郡玉穗村字グミ澤　立道操
大和國御所町幼稚園　早川しか

改姓

（今井）星野きく

轉居

山梨縣北巨摩郡江草村へ　篠原しづ
臺灣彰北縣臺北石防街一丁目廿二番戸並木商方へ　水主こう
本郷區龍岡町三十四番地へ　東基吉
仝　東くめ

會費領收

自明治三十四年十月廿五日至同十一月廿五日

一金二拾錢	自三十四年十一月至同十二月	尾崎勝巳
一金五拾錢	自三十四年十一月至三十五年三月	相馬宗高
一金七拾錢	自三十四年十月至三十五年四月	瀧澤よう
一金八拾錢	自三十四年九月至三十五年四月	後藤いと
一金壹圓	自三十四年六月至三十五年三月	矢島とせ
一金壹圓拾錢	自三十四年十一月至三十五年九月	村山いく

一金六拾五錢　自三十四年八月至三十五年二月　筒井はる
一金三拾錢　自三十四年八月至同十月　中山すま
一金三拾錢　自三十四年八月至同十月　宮本こすえ
一金三拾錢　自三十四年八月至同十月　川村すみ
一金壹圓　自三十四年十月至三十五年七月　藤村いと
一金壹圓　自三十四年十一月至同十四年十二月　淺田しづ
一金拾錢　自三十四年十一月三十四年十一月　木下すゞ子
一金五拾錢　自三十四年十一月至三十五年三月　板野すゞ
一金壹圓二拾錢　自三十四年五月至三十五年四月　鹽野吉兵衛
一金六拾錢　自三十四年四月至同九月　加藤萬代
一金六拾錢　自三十四年四月至同九月　今井きく
一金六拾錢　自三十四年八月至三十五年一月　若尾くす
一金壹圓　自三十四年十二月至三十五年九月　早川しか
一金二拾錢　自三十四年十一月至同十二月　永田らく
一金五拾錢　自三十四年十一月至三十三年五月　吉田たみ
一金九拾錢　自三十四年四月至同十二月　柳きん
一金二拾錢　自三十四年十一月同十二月至三十四年　神通せき

一金五拾錢　自三十四年十一月至三十五年三月　矢澤わさ
一金七拾錢　自三十四年四月至同十月　大友兵馬
一金七拾錢　自三十四年四月至同十月　渡邊こう
一金七拾錢　自三十四年四月至同十月　西村さめ
一金五拾錢　自三十四年十一月至三十五年三月　秋山さみ
一金五拾錢　自三十四年十二月至三十五年四月　立道操
一金五拾錢　自三十四年八月至同十二月　福田米
一金四拾錢　自三十四年十二月至三十五年三月　伊澤丑三
一金五拾錢　自三十四年十一月至三十五年三月　福地くま
一金八拾錢　自三十四年九月至三十五年四月　金岩かをり
一金六拾三錢　自三十四年十一月至三十五年四月余り三錢　石島廣

一金六拾錢　自三十四年八月至三十五年一月　相賀よしは

正誤

第十一號掲載ノ十月の誤に付き訂正す

此廣告に依り御注文の御方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

女子高等師範學校教授黑田定治先生校閲 堀越源次郎君 土屋橘四郎君 共著

言文一致 國語綴り方

全一冊 クロース洋裝製 定價金四十錢 郵稅金六錢

本書は小學校國語綴り方につき是が脩述の方法程度及材料の撰擇上幾多の疑問を明解し文例及教授方法を各學年各學期各月に配當して示し且兒童をして綴らしむる各般の場合につき丁寧に意見を述べたるものにて要は實地教育者諸君教壇の好伴侶たらしむるにあり

國語綴り方練習帖

尋常科 高等科 定價各金 上製十錢 並製八錢 郵稅各金二錢

●本書は小學校賞與品及家庭作文の練習として最も適品なり

國語研究會編

新體 兒童の文例

全一冊 定價金十錢 郵稅金二錢

●本書は小學校賞與品として家庭の讀本にして最も適當せり

發兌 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂

從六位落合直文先生作歌
岡山縣師範學校教諭奥山朝恭先生作曲

學校生徒行軍歌 湊川

全一冊 定價金五錢 郵稅金二錢

本書は明治卅二年六月發行以來廣く江湖の御高評を得て今や都鄙學校の生徒諸君之を謳歌し玉はざるはなきに至れり然るに近來二三奸譎の徒其盛況を羨妬し或は其全部を剽竊し或は一部の形狀を變し僞版を作製し之を發賣するものあり因て弊店は目下之を其筋に告訴中につき他日嚴明なる制裁を受くべきは言を俟たざれども大方諸君或は此際類似僞物の爲めに欺惑せられ賜ふ事なきを保せず願はくは作歌作曲兩先生の記名及び弊店藏梓の正本に御注意の上舊に倍し多數御採用の榮を賜はらんこと偏へに希望奉り候

發行所 神戸市元町通り七丁目十七番屋敷 熊谷幸助

大賣捌 東京市日本橋區本石町三丁目 金昌堂

（後附の一）

此廣告に依り御注文の御方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

總裁小松大宮妃殿下
大日本女學會
副總裁鍋島侯爵夫人
東京麹町下二番町
廿七番地
發行

おとめ

毎月一回
十五日發行
定價金拾五錢
全國無遞送料

第十號（十月發行）目次

◎卷首
◎學說
●女子の身体操練　ヒユース女史肯係
◎學藝
心理學大意
理化問答（よい天氣）　島村抱月
和書解題（萬葉集と懷風藻）　朝夷六郎
漢書解題（孟子）　喜田貞吉
沙翁梗概（ハムレット）　丸井圭治郎
作文批評　中島孤島
作歌批評　今泉定介
◎修身
主婦たる者の德義　大口二郎
女德の一端（續）　香雪女史
◎齊家
割烹（鯉）　三輪田眞佐子
家庭遊戲　西川政子
法制談（日本臣民と外國人）　愛宕憲
◎世務
經濟談（手形）　伊藤秋
各地産業談　岡戸南
飯田元結、平野水
●譚草
●小說――暗流（八）　水谷不倒
◎詞藻
（●かへらぬ涙　●庚子夏日記（つゞき））　植松とく子
（●みやび會員詞藻　●みやび會作歌課題）　坂正臣
◎雜錄
●ヒユース女史の傳　安井哲
●東海道汽車の旅　喜田貞吉
●北海道視察所感　下家尊
●愛國婦人會に望む　千福子
●諸國小兒語（二）　男爵
◎彙報
●內外要報數十件

第十一號（十一月發行）目次

◎卷首
（●夫人濱子刀自の肖像　●鄭夫人の頌功文）
●女子の身体操練　ヒユース女史
◎論說
心理學大意
理化問答（一滴の水）　島村抱月
星の話（人馬宮）　朝夷六郎
和書解題（六國史）　喜田貞吉
◎學藝
作文批評　丸井圭治郎
作歌批評　中島孤島
◎修身
虐女のしるべ　今泉定介
兒童の發育と音樂　大口二郎
◎齊家
割烹（松竹、鮭、鮭子、）　香雪女史
家庭遊戲　三輪田眞佐子
◎世務
法制談（官吏）　西川政憲
經濟談（手形のつゞき）　愛宕
各地産業の實況（養殖眞珠）　廣本樓子
●英女皇ヴヰクトリアの傳（七）　尾上柴舟
◎史傳
●小說――暗流（九と十）　下田歌子
◎譚草
●なさけの花　小林此木隱花
●鄭夫人の叙勳を祝する歌（數百首）　大口二郎
◎詞藻
●天津籠城中の鄭夫人　今泉定介
●圖案「秋月明」　喜田貞吉
●東海道汽車の旅（完）　朝夷六郎
●床の間飾心得　島村抱月
◎雜錄
●李鴻章の薨去、○公共心の發達　伯爵
◎時事
◎彙報
●內外要報數十件

大賣捌
東京市神田表神保町三
東京堂

（後附の二）

高等師範學校教授吉田彌平君
女子高等師範學校教授齋藤鹿三郎君 共閲
序

新体 兒童普通文例

和裝美本
全一冊定價金廿錢
郵税金四錢

昨年改正小學校令施行規則を發布せられて以來國語科教授に一大變革を生じ就中生徒に綴らしむべき文体に至りては意見百出殆んど歸着すべき所なし本書は實に温和漸進派の學者と實驗教育者との團体なる國語研究會が一年有余の日子を費し各地方數校の生徒をして文体に頓着せず思ふがまゝに綴らしめたる材料を今日に最も適切なる達意主義文体に編したるものなり教師諸君の參考としては國語綴方教授書と相俟て教授の指針となり生徒にして之を讀まば蓋し興味津々たる中に已れの文材を誘發せられ思想一たび浮べば筆之に隨ふの境に達し得ん

●尚本書は小學校賞與品として最適當

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

發行所 金昌堂

國學院講師逸見仲三郎先生校閲
國語研究組合編纂

國文通釋

全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

此書物は只今各府縣の中學校にて教科書として採用して居る各種の讀本中より六ヶ敷字句詩歌等抜き出して之に簡單なる解釋を施したるものであれば中學校の生徒諸君は申すまでもなく師範學校や高等女學校や小學校教員養成所などの生徒諸君に至るまで苟も國文を繙かんと思ふ御仁達の一日も書架の片隅に闕きてならない必要の書物であれば一冊を求めて其虚妄でない事を知り賜へ

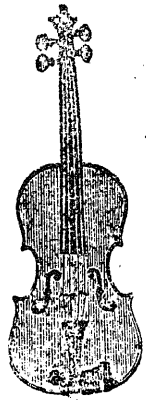
東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

發行所 金昌堂

(婦人と子どもの第一卷第十二號)
明治三十四年十二月五日發行(毎月一回五日發行)

◉洋琴　金拾圓以上弐千圓迄各種

◉ウイオリン　鈴木製金五圓以上五拾圓迄各種　舶來品金八圓以上百五拾圓迄各種



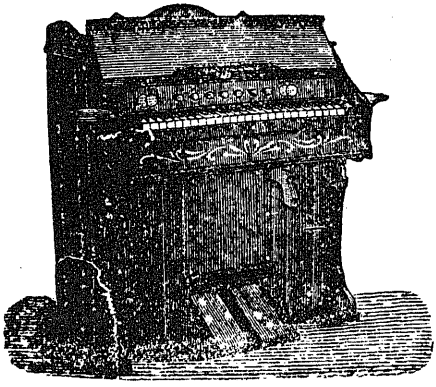
◉手風琴

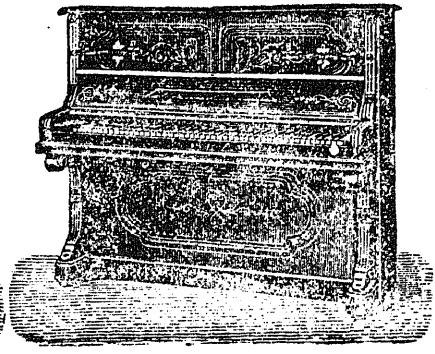
保險附
山葉風琴

一號　金貳圓五拾錢以上
二號　定價金參拾圓迄各種
三號　定價金廿六圓五拾錢
四號　定價金參拾七圓
五號　定價金四拾參圓
六號　定價金五拾五圓
七號　定價金六拾五圓
八號　定價金七拾五圓
九號　定價金百貳拾圓
十號　定價金百五拾圓
十一號　定價金百參拾圓
式場用新形　定價金四拾五圓
メーソンモデル第一號　定價金八拾圓
全第二號　定價金百五十圓
全第三號　定價金貳百圓

(荷造費を要す)

◉右の外兩用風琴、吹奏琴ハーモニカ、フラジョーレット其他各樂器幷に和洋音樂書各樂器附屬品各種





新刊廣告

◉中學唱歌　東京音樂學校編纂　袖裝全一冊定價金三拾錢　洋珍十五錢郵稅四錢

◉重音唱歌集　小山作之助編　洋裝美本　第一集　第二集　定價金五拾錢　定價金七拾五錢　郵稅不要

◉女學唱歌　山田源一郎編　洋裝美本　第一集　第二集　定價金五拾錢　定價金六拾五錢　郵稅不要

◉幼稚園唱歌　共益商社編　洋裝美本　全一冊に定價金四拾錢郵稅不要

◉オルガン教則本　島崎赤太郎編　洋裝大形美本　二之卷定價金三拾五錢　三之卷近刊　郵稅六錢　郵稅八錢

◉新遊戲　鈴木米次郎編　音樂適用　洋裝美本全一冊　定價金三拾錢　郵稅不要

◉小學唱歌教授法　石原重雄著　新撰　洋裝美本全一冊　定價金三拾五錢　郵稅不要

◉勸進帳　北村成於作譜　長唄樂譜編　全一冊　定價金壹圓　郵稅不要

◉舞踊案內附舞踊曲　鈴木米次郎編　洋裝美本全一冊定價金七拾五錢　郵稅不要

◉調律修繕　ピヤノ、オルガン　郵券二錢

◉目錄進呈　御入用

東京市京橋區竹川町十三番地　共益商社樂器店
(電信略號ヨキ)
(電話新橋五百廿九番)